居た。忽ち中村竹造が激烈な腹痛を起し七顚八倒する。全く神罰が當つたのだと一同は恐れ入つて謝罪をなし、麻芥を一屠遠き林の中へ持ち運んだ。神明聽許遊ばしたか俄に痛みも止まつたので頑固一遍の中村も、其神德に感激した樣であつた。敎祖の一行は淋くにして沓島に漕ぎついた。流石に昔から人の恐れて近づき得ない神島だけありて、冠島とは大變に趣が違ふてゐる。今日は格別穩かな海だと云ふに拘はらず、山の如きウネリが頻りに打ち寄せて來る。鷗や信天翁、鵜などが岩一面に胡麻を振りかけた樣に止まつて、不思議相に一行を見下ろして居る。波の上には數萬の海鳥が浮きみ沈みつゝ、悠々と遊んでゐる。音に名高き斷岩絕壁、小舟を漕ぎ寄せる場所が見つからぬ。兎も角も此島を一周して適當な上陸點を探らうと評定して居ると、敎祖が是非に釣鐘岩へ舟を着けよと云はれる。命のまに〳〵釣鐘岩の直下へ漕ぎつけて見ると恰も人の背中の如く險峻な斷岩で如何しても攀きつく事が出來ない。愚圖々々してゐると、激浪のために舟を岩に衝突させ、破壞して了ふ虞があるから、暫時も躊躇してをる場合でない。海潮は『地獄の上の一足飛び』と云ふ樣な肝を放り出して腰に入尋繩を結びつけたまゝ、舟が波にうたれて岩に近づいた一刹那を睨ひすまして、岩壁目蒐げて飛びつゝた。幸にも粗質な岩で手足が滑らぬ、一丈四五尺程の上の方に少しばかりの平面な處がある。そこから舟を目蒐けて繩の片端を投げ込めば、舟人が手早く拾ふて舟に結びつける。最早大丈夫だと岩上からは上田の海潮が一生懸命に繩を手繰り寄せる。下からは眞正の海潮が敎祖を乘せた舟を目がけて押し寄せ、來るや〳〵母實呂々々々々に持ち渡す。敎祖は手早く繩に縋り乍ら漸く上陸された。續いて三人も登つて來た。綾部で組み立てゝ持つて來た神祠をといて、柱一本づゝ舟人が繩で縛る、四

方こ福島がひきあげる。漸く百尺ばかりもある高所の二疊敷ほどの平面の岩の上を鎭祭所となし、一時間あまりもかゝつて漸く神祠を建て上げ、艮の大金神國常立尊龍宮の乙姫、豐玉姫神、玉依姫神を始め天地八百萬の神等を奉齋し、山野河海の珍物を供へ終り、致祖は恭しく祠前に靜座して聲音朗かに天下泰平神軍大勝利の祈願の祝詞を奏上される。

話は一寸後前になつたが、第一着に海潮が遷座式の祝詞を恐み〳〵白し上げ、最後に一同打揃ふて大祓の祝詞を奏上した。島の群鳥は祝詞を拜聽するもの、如くである。何分北は露西亞の浦塩斯德港迄つゝ放しの島であるから、日本海の激浪怒濤は皆此沓島の釣鐘岩に打つかるので一面に洗ひ去られて、此方面は岩ばかりで土の氣は見たいと思ふても見當らなかつた。沖の方から時々寄せ來る山の樣に大きな浪か此釣鐘岩に衝突して、百雷の一時に鳴り響く樣に、ゴン〳〵ドヽン〳〵と烈しき音が耳を刺戟する。舟人は今日は數年來に見た事のない穩かの波だと云つた浪でさへも、これ位の音がするのだもの、海の荒れた日にはどんなに烈しからうと思へば、凄い樣な心持がして來た。船人の語る所によれば此釣鐘岩には、文錄年間に三種四郎左衛門と云ふ男、數百人の部下を引率れ冠島を策源地として陣屋を構へ、時の天下を横領せんと軍資金を集むるために海上往來の船舶を掠め海賊を稼いで、此岩の頂上に半鐘を釣り斥候の合圖をし冠島との連絡をとつて居たので、被害者は數ふるに暇なき迄續出したので、武勇の譽高き豪傑岩見重太郎がこれを聞いて捨ておけぬと計略を以て吳服屋に化け、一人一人舞鶴へ引寄せ牢獄に打ち込み、悉皆退治したと傳ふる有名な島で、其後は釣鐘島、鬼門島と稱し誰も此沓島へは來たものはないと云つてゐた。然るに今回初めて

敎祖が世界萬民のために、百難を排して渡り來られ、神々樣を奉祀し、天下無事の祈禱をされたのは實に前代未聞の壯擧であると云ふので、東京の富士新聞や福知山の三丹新聞を始め其他の諸新聞に連載された事がある。

さて此島を一周りして、奇岩絶壁を嘆賞しつゝ冠島へ再び舟を漕ぎ寄せ、一行九人打揃ふて神前に拜禮し、供物を献じ終つて又此冠島も一周する事となつた。周圍四十有餘丁あり、世界の所有草木の種子は皆此島に集まつてあると云はれてある。昔は陸稻も自然に出來てゐたのを、大浦村の百姓が肥料を施して汚したので、其後は稻は一株も出來なくなり、雜草が密生する樣になつたのだと二人が話しつゝ覗き岩迄漕ぎつけて見れば、數十丈の岩石に自然の隧道が穿たれてある。屏風を立てた樣な岩や書籍を積み重ねた樣な岩立ち並び、龍飛び虎馳る如き不思議の岩が海中に立つてゐる。少しく舟を西北へ進めると、一望肝を消すの斷巖、一瞻胸を慄かすの碧潮に鯛魚の群をなして縱に泳ぎ、緯に潜み、翠紅、色交々亂れて恰も錦綾の如く、感賞久しうして歸る事を忘れるに至る。此處に暫く遊んでゐると、十年ち壽命がのびる樣である。世の俗塵一切を拂拭し去つた樣な觀念が胸に湧いて來る。兎に角男女を問はず信徒たるものは一度は是非參詣すべき處である。

九日の夕方、恙なく舞鶴へ歸着し翌十日舞鶴京口町で一行記念の撮影をなし、目出度本宮へ歸る事となつた。

（大正一一、一〇、一七、舊八、二七、北村隆光錄）

第一五章　怒濤（一〇五二）

教祖や會長に反對の連中がヒソ〳〵と首を集めて、冠島丈けは幸ひに教祖の一行五人が無事に參つて來よつたが、到底沓島へは教祖のやうな婆アさんが行けるものでない、キッと神の怒にふれて、舟が轉覆し、海の藻屑になつて了ふか、但は不成功に了つて中途から引返して歸るに相違ないとタカをくゝつて嘲笑を逞しうしてゐた所が、見事今回又もや沓島開きが出來たといふ成功談を聞き、負ん氣になり

「ナニ教祖のやうな婆アさんや娘が行く所へ行けないといふ事があるものか」と、二十人の頑固連中が沓島參拜を企て、大暴風雨に遭ふて命カラ〳〵、冠島に辛うじて避難し、一命を拾うた物語を述べておく。

對岸の清國では團匪の騒亂で、各國の政府が居留民保護の爲に聯合軍を組織して北京城へ進軍中であつた、茲に出口の教祖は東洋の前途を氣づかひ、神命のまに〳〵、二度までも無人島へ渡り、冒險的の企圖をこらして、艱難辛苦を嘗め玉ふにも拘はらず、足立其他の役員に狂惑された信徒等は、利己一片に傾き、おのれが卑劣心より口々に、今回の教祖一行の冒險的渡海を非難し、好奇心にかられたり、一方には信者集めの手段を講じたものだなどと、盛に熱罵を逞しうしてゐる者のみである。判事ハリバートンの言に曰く「權威のある所には自然に不從順の傾向あり」と宣なる哉、近來教祖及上田の名聲の漸く大ならんとするを嫉妬し、いろ〳〵と排斥妨害運動に餘念なき連中が二度までも孤島に參拜の成功に益々嫉視反抗の氣勢を高め、今度は是非共會長を案内者として沓島へつれ行き、鐘岩の斷岩へ登り、いろ〳〵とよからぬ望みを

遂げんと、某々等數名は鳩首謀議の結果、今一度勝手を知つた會長に同行參拜せん事を强請して止まなかつた。万一にも否まうものなら、卑怯者と誹るであらう、今まで屢彼等が奸計に乘せられ、九死一生の難に遭遇したる記憶の新なる一身上に取つては、恰も狼虎の道づれも同樣である、何時間隙があつたら、咬殺されるやら計り知られぬ危險極まる島詣でであつた。然し乍ら敵を恐れて旗を捲くのも、神の道を宣傳する者の本意でないと、確く決心し、日夜沐浴齋戒心身を清め、神の加護と敎祖の御神德に倚信して、彼等と共に出舟參拜する事を承諾した。

万一を慮つて平素熱心なる信者、竹原房太郎、木下慶太郎、森津由松、福林安之助、時田、四方安藏、甚之丞等の面々を引つれ、心の合はない敵味方合せて廿一名は明治三十三年七月二十日を卜し、いよ〳〵決行することとなつた。

二十一日の未明、四隻の漁舟は罪重き一行を乘せて、舞鶴港を漕ぎ出し、海上七里許り、冠島は手に取るやうに近く見えて來た。モウ一息といふ所で、俄に東の空が變な色になつて來た。四人の舟人はあわてふためき、口を揃へて、

「サア皆さん覺悟をなされ大變なことになつて來た。あの雲の樣子では大颶風だ」

と叫んでゐる。見る間に東北の空に眞黑の妖雲がムラ〳〵と湧き出した。迫々風が荒くなつたと思ふ間もなく、颶風襲來し、潮を蹴り飛ばし、波濤怒り狂ひ、勃乎たる海風の聲は轟々と、南に北に東に西に猛び廻る。騷然たる聲裡、山岳のやうな波、堅乎たる巖のやうな波浪が來る、其物凄きこと筆舌の盡す限りではなかつた。小舟を木の葉の如くに中天にまき上げるかと見れば、直に千仞の波の谷間につき落し、無遠慮に舟玉の神の目も恐れず、勝手氣儘に奔弄し出した。波と波との間にかくれた一行の舟

は、どうなつて了つたか、其影さへも見ることが出來ぬので、互に胸を聚かしつゝあつた。恰も地獄の旅行をしてゐるやうで、何れも靑息吐息の爲體、蛭に鹽、猫に出合ふた鼠の如く、舟底にかぢりついて縮かんでゐる。誰も彼もウンともスンとも得言はぬ弱り方、中にも松井元利といふ京都の信者は、因果を定めたか、生死の外に超然として動せざること岩石の如く、頭から潮を浴び乍ら、泰然自若として只天の一方のみを眺めて居る。時田金太郎が小便のタンクが破裂し相なと云つて、激浪目がけてワ〳〵乍ら放尿する、舟人が……そんな大男が立つては危險だ……と喧ましく叱りつけるやうに叫ぶ。それに引替へ、臆病風に襲はれた中村は震ひ戰き、始めて口を開き中村「會長さん、一体どうなりますぢやいなア、今あんたの頭の上の所に大きな海坊主がいやらしい顏で、長い舌を出して、私をつかんで海へ投込むやうな手つきをし乍ら……それ今其處に睨んで居りますわいな、どうぞ坊主をいなして下され、あゝ小便がしたくて堪らぬ、どうしたらよからうか」

と周章狼狽のさま實に見るも氣の毒であつた。小便がこらへきれなくなつたので、とう〳〵自分の飯碗の中へ放尿して、それを海へコワ〳〵投げ込んでゐる。中村は驚愕の餘り弱腰が抜けたと見ゐて、チッとも身動きが出來なくなつてゐたのである。

烈然たる颶風はよく千里の境域に達し、猛然たる旋風は万里の高きに依つて廻るかと怪しまれ、龍ならずして龍吟じ、虎ならずして虎嘯く如き光景である。一波忽ち來りて漁舟に咬つく、其度毎に潮水を澤山において行く、又次の一波のお見舞迄にと、一同が力限り命が惜さに、平常にはこけた箒もロクに起さぬやうな不性男が桶や茶碗や杓子で、一生懸命に潮水をかへ出してゐる、又一波來つて、潮水を頭といはず、

春中といはず、無遠慮に浴びせて通る、忙しさ恐ろしさ、到底口で言ふやうを事ではない。

會長は一生懸命に天津祝詞を奏上し始めた。天の助けか地の救ひか、少し許り風がやわらいで來た。從つて波も稍低くなつた。此一刹那に、舟人は手早く四隻の舟を二ケ所へ漕ぎ寄せて、二隻づゝからくんでみた、かうすれば舟の覆沒を免れるからである……サア是で一安心だと思ふ間もなく、今度は一層激烈な大颶風の襲來となつた。

雨は沛然として盆を覆へすが如く、車軸を流すが如く、手きびしく頭の上から叩きつけるやうに降つて來る。漂渺として際限なき海原も今は咫尺辨ぜざる迄に暗黑に包まれた。怒れる浪は揉つもまれつ、荒磯の岩をも粉碎せずんばやまぬ猛勢である。白き巖を振ふて立てる浪は眞一文字に舟に組みつく、其度毎に小舟がグラつき轉覆せんとする危さ、かくある以上は、平素から教祖を非難してゐた連中も、會長を嫉視してゐた小人もチウの聲一つ得上げず、震ひ戰き、今は只神に依り、教祖に從ひ、會長に依賴して、命の安全を計るより外途なきに至つたのである。

人間といふものは斯うなつては實に弱い者である。神のおいましめを蒙つたと各自思ふたのか、腹の中に企んでゐたごもくたを悉皆吐き出して前非を悔悟する、誰も彼も叫はん時の神賴みといふ調子で、一心頂禮口々に神文を唱へ、神にお詫を申してゐる村上清次郎といふ男は天から四十三本の御幣が我舟にお下りになつて、我等を保護して下さるのが拜めますから、私は有難い事だと思ふて安心してゐます……と嬉し相に感謝してゐる。これは信仰の力に依つて、目ざめ、神のお守りあることを天眼通で見せて貰ふたものである。森津歌吉は何ともかとも得言はず、目をむき口を閉ぢて、波

許り恐ろし相にながめ、時々扇子を以て波を片方へ押しのけるやうな氣取で、妙な手附をして拜んでゐる。舟に酔ひ、泡をば福林安之助が入百屋店をたぐり上げ苦しんでゐる、會長は聖地を出立の際、教祖より、

教祖「今度は餘程神さまを頼んで氣をつけて參らぬと、先日の參拜のやうに樂には行きませんぞや、罪の塊計りだから、萬々一危急の場合、命に關するやうなことのあつた時には、之を開いて見るがよい……と密封した筆先をお授けになつたのを、大切に肌の守りとしてつけてゐたが、披見するは今此時だと、懷中より取出し、押しいたゞいて披いて見れば、中には平假名計りで、何事かが記されてある、其筆先の大要は

「艮の金神が出口の手をかつて氣をつけるぞよ、慢心は大怪我の元ぢやぞよと毎度筆先で知らしてあるが、今の人民は智惠と學計りにこり固まり、途中の鼻高になりて、神の教を聞く精神の者がなきようになりて、天地の御恩といふことを知らぬ故、世の中に惡魔がはびこり、世が紊れる計りで、此地の上がむさ苦くて、神の住居いたす所がないやうになりたので、誠の元の活神は此沓島冠島に集まりて御座るぞよ、それ故に餘程身魂の研けた者でないと、此島へは寄せつけぬぞよ、此曇りた世を水晶にすまして、元の神國に立直さねばならぬ大望がある故に明治廿五年から、神は出口の手をかり、口をかりて、いろ〳〵と苦勞をさして、世間へ知らせてゐるなれど、餘り世におちぶれて居る出口直に御用をさす事であるから、今の人民は誠に致す者がないぞよ、人民は此結構なお土の上に家倉を建て青疊の上で、安心に月日を送らして貰ひ乍ら、天地の御恩を知らぬ計りか、神は此世になきものぢやと思ふて居るものがちであるから、神の守護がうすかりたなれど、人間は神がかまはねば

一息の間も生て居る事は出げぬぞよ、人間の此世を渡るのは、丁度今此小舟に乗り、荒い海を、風と波にもまれて渡るよなものである、誠に人の身の上ほど危いはかないものはない、もし此舟に一人の舟人と艪櫂がなかつたならば、直に行きも戻りもならぬよになり、舟を砕くか、ひつくり返るか、人も舟も海の藻屑とならねばなるまい、人民も神の御守護なき時は少時も此世に居ることは出來ぬ、此世の中は人を渡す舟のようなもので、神の教は艪櫂である、出口直は此舟を操る舟人のよな者である。今の困難を腹わたにしみ込ませて、いつ迄も忘るゝ事なく、神さまの恵を悟つて信心を怠るなよ、何事も皆信心の力によつて、成就するのであるから、神の御子と生れ出でたる人民は、チッとの間も神を離れるな、道をかへるな、慾に惑うな、誠一つで神の教に従へ、災多き暗がりの世は誠の活神より外にたよりとなり力となる者はないぞよ云々」

といふ懇切なる神示であつた。あゝ神は我等一行の我慢を戒め、邪念を拂ひて、誠の道に導き至幸至福ならしめんが爲に、此荒き海原へ連れ出し、かくも懇切なる教訓を垂れさせ玉ひしかと、惡鬼邪神の如き連中も、こゝに始めて神の厚恩を悟り、教祖の非凡なる神人たるに舌をまくのみであつた。

又其筆先の終りの所に一段と細い字を以て、

「上田の持ちて居る卷物は、此際披き見よ」

と示されてあつた。此卷物は本田親法先生より、長澤豐子の手を通じて授けられたる無二の寶典である。片時も肌を離さず、危急存亡の場合、神のお許しあるまで、決して開くなとの教を確守し、今迄大切に肌の守りにしてゐたのであるが、今や一行の精

靈を救はねばならぬ場合に當り、始めて開く玉手箱、何が記してあるかと、恐る〳〵押頂き伏し拜み、披き見れば……

尊きかも、畏きかも、救世の神法、靈學の大本と數十百に亘る神業、其大要は喜樂が高熊山の靈山にて見聞したる事實と符合し、神秘に屬し、他言を許されぬもののみであつた。會長は此一卷に納めたる・神法を實行する時機正に到來したりと、天にも昇るが如く勇み立ち、心鏡正に玲瓏たり、百折撓まず屈せず、暴風强雨何者ぞ、水火何者ぞ、滿腔の精神は益々颷風と戰ひ、言靈の神力を以て、どこまでも之に打克たんとの勢頓に加はり來る、慾を離れ、利をはなれ、家を離れ、自己を離れ、社會を離れて只神あるのみ、全く神の御懷に抱かれゐる身は、如何なる事も恐るゝに及ばず、大丈夫大安心なり、怒れよ狂瀾、躍れよ波濤、吹けよ强風、荒べよ暴風、汝の怒りは雄大なり、壯烈なり、我は今汝の怒りに依つて生ける祓の神の教を受けたり、今の會長は以前の會長に非ず、今は全く神の生宮となれり。暴風强雨來れと、十曜の紋の記されし、神官扇を差上げて、天の御柱の神、國の御柱神、天の水分神、國の水分神、大和田津見神靜まり玉へ……と宣る言靈に、不思議や風やみ雨やみ波從つて靜まりぬ。舟人はおどろいて、

「先生は神さまで御座いませう」

と舌をまいて感嘆してゐる。抑も我國は神の御國なれば、惟神の道と稱し、幽玄微妙の神教あり、神力無限の言靈あり、實に尊き天國淨土である。舟は漸くにして冠島へ避難する事を得た。第一着に老人島神社に供物を献じ救命謝恩の祝詞を奏上し、次いで綾部本宮を遙拜し、一行の罪重き者の沓島參拜は到底神慮に叶はざるべしと再

歸路の安全を祈りつゝ厚き神の守りの下に漸く舞鶴に歸着し一同茲に一泊することゝなつた。

大丹生屋の二階の一間に横臥して所勞を休めてゐる、會長の枕許へ杉浦萬吉といふ男出で來り、手をつかへ、面に改悛の色を現はし、涙をハラ〳〵と流し乍ら、

杉浦「先生にお詫を致さねばならぬ事があります、申上ぐるのも畏きことなれど、實の所は我々數名は相談の上、先生の懐にある卷物を預り、其上〇〇せんと〇〇をなし、本會の爲に雲霧を拂ひ清め、其後釜には四方春三さんを据ゑて、我々が所思を貫徹せんと欲し、其手段として先生に對し、沓島參拜を無理に御願したので御座います、併乍神樣の嚴しきおさばきにより、命辛々の目に會ふたのは、全く神さまより我々に改心せよとの御戒めで御座いませう、何うぞ自分等の罪を赦して下さいませ」

と平身低頭して聞くも恐ろしい物語をするのであつた。會長は前日より略探知してゐたので、今更餘り驚きもなさず、笑うてこれを許した。暫くあつて綾部の本部より教祖の命令によつて四方平藏が四方春三を伴ひ、沓島行きの一行を迎ひに來り、一同の無事を祝し、冥土の旅から歸つたやうに小をぎりして喜んだ。四方春三も杉浦の改悟を聞いて包むに包みきれず、陰謀を逐一自白し、

四方「あゝ私の心には惡神か潜んでゐたのでせう、これからキッと改心致します」

と眞心から涙を流して有体に謝罪するのを見ると、却つて可哀想になつて來た。雨降つて地固まるとやら、今度の遭難にて誰も彼れも一時に悔ゐ改め、道の曙光を認めるやうになつたのも、全く神の深遠なる思召によることゝ、會長は益々其信念を鞏固な

らしめた。

二十二日の夕方無事に舘に歸り、神前に一同拜禮し各家に歸つた。

（大正一一、一〇、一七、書八、二七、松村眞澄錄）

瑞　月

古郷の月の濱邊に吾妹子は
　嘸なげくらむ淋しき留守を

ふるさとの人魚が泣くといふ濱に
　二世を誓ひし人の偲ばゆ

第一六章　禁　獵　區（一〇五三）

梅雨朦朧として蒼伺暗く、濕潤家に滿ちて萬物微花を生じ、山色空濛烟光霏々たる六月の二十一日、狹田も長田も手肱に水泡かき足り、向股に泥かきよせて早乙女の三〻伍々隊を成し、蓑笠の甲冑を取よろひ、手覆脚絆の小手脛當、聲勇ましく田歌を歌ひつゝ、國の富貴を植ゑて行く、狗の手も人の手てふ農家の激戰場裡、安閑坊喜樂、梅田柳月、大槻傳吉の三人の土倒し者は、今しも本院を立出でゝ、本町西町とふみ拔く道は狹くも廣小路、驅け出す馬場や六つの足、綾部停車場にと走せ付けた。往くは何處ぞ和知の川、音無瀨鐵橋音高く、梅雨を犯して梅迫驛、停車間もなく、眞倉の洞

穴、小暗き中を我物顔に轟々と脱け出づれば、山媛の青き御袖を振はねて、炭團の如き三人の顔を暫し掩はせ玉ふも、時に取つての風情である。車中乍ら心も勇み躍り欣喜の餘り手も足も舞鶴驛に舞下り、新橋詰の船問屋西川方へと流れ込んだ。

折柄切りに降り注ぐ大粒の雨に膽を打たれたか、豫約の水夫は刻限來るも俤だに見せぬ。天道殿は罪重き三人の參島の企てをおぢやんにせんず御心にや、意地惡く間斷なく、無遠慮に天水分神を遣はせ玉ふ。何時迄待つても空が晴れさうにも無いが、雨は元より覺悟の前だ。併し肝腎の舟の神が御出にならぬのには大閉口、さりとて中途に歸るのは死んでも厭な三人、疊の上に居ても死ぬ時には死ぬる、生死は天なり、惟神なり、是非水夫を呼びにやつて下さいと促す。西川の後家さんも止むを得ず、田中橋本二人を、人を以て呼寄せた。出口教祖が始めて沓島開きをされた時に御供をした水夫である。數千の漁夫の中にて最も剛膽な、熟練な聞ある選抜きの漁夫、これなら大丈夫、何時でも二つ返辭で往つて呉れるだらうと喜び勇んだ甲斐もなく、案に相違した弱音を吹くのである。

「何ぼ信神で參拜るにしても、神様の御守護があるにしても、此氣色では鬼で無くて行けんでの、マア二三日ゆるりと遊んで待つてお呉れ。天候が定まつたら、お伴をさして貰はうかいの、明日は又冠島様の一年一度の御祭典で、今晩は冠島の明神が神船に乘つて、對岸の新井崎神社に御渡海になるので恐ろしい夜さだ。中々舟は出せんでの、若し神の御心にでも障つたら大變だ。桑名の龜造で無けら、今晩舟を出す者は無いわいの」

と臆病風に魅せられたか、一向色よい返事をしてくれぬ。三人は況して今夜の樣

な行けぬと云ふ日に行つて見たいのが希望だ。是非〳〵賃金は厭はぬ、やつてくれい……と泣く樣に賴む。水夫は益々恐怖心に驅られ、ソロ〳〵卑怯にも逃げ歸らんとする。逃げられては堪らぬので、口々に宥めつ賺しつ、直往勇進斷々乎として行へば鬼神も之を避くとの敎祖の神諭を楯に取りて動かぬ。互に押問答の果しもなく、遂には水夫も口をとぢて呆然として、只々謝絶一點張り、波に取られた沖の舟で、取付く島がない、我等平時に於てこそ溫柔なること綿羊の如くなれ、目的遂行に對しては猛虎の如く、一向直進眼中風雨なく海洋なし、瞞腔の勇氣は烈火の如く挺身突擊死を見る歸するが如き覺悟ありと雖も、如何せん舟を操ることを心知らない三人は、肝腎の機關士に見放されたが最後、神ならぬ石佛同樣の身、海上一寸も進航することが出來ぬのである。外の水夫を雇入れんにも、生憎一人も應ずる者がない、とう〳〵根負して

「そんなら明朝一時まで自分等は待つ事にせう、キツと雨も止み、快晴になるは請合の西瓜だ、吾々の出修には必ず天祐があるから安心して行つてお呉れ」と口から出任せ、覺束なき豫言を二人は嘲笑ひ、自分等を馬鹿にした樣な面付でシブ〳〵歸つて行く。

三人問屋の部屋でガツト虫の樣に小さく縮かんで寢に就いた。大方白川夜船でも潜いで居たであらう。一眠したと思ふ時分に、大丹生屋の門口を打叩き

「お客さん書の船頭が來た」

と叫んでゐる。……サア占た……と一度にはね起き、又も御意の變らぬ内と、直に支度に取かゝつた。

「船頭さん、天氣はゼロだらう」

とからかへば

「イヤ氣色は大變よい樣だが、往ける丈行つて見な判らぬ」

とまだ炎に切らぬ返事である。

時節到來港口を出たのは廿二日の正に午前二時であつた。ヤハリ空は曇り切つて星一つ靑雲一片見當らぬが、米價のあがる樣雨がビリ〳〵と怖相に一行の顏を嘗める位例の南泊邊まで乘り出すと、火光海面を照らして疾走せる一隻の大汽船に行違うた。其動波の爲に我小舟を自由自在に飜弄されたのは、實に癪にさわつて堪らぬ。暫くすると天は所々雨雲の衣を脫いで、蒼い雲の肌を現はし、點々明滅、天書現はるゝも、連日の降雨で內海の部分は水が濁つて居るせいか、今夜は淸き星が波に宿を借りて居らぬ。博奕ケ崎も後に見て漕ぎ行く程に、東天紅を潮して遙の山頂より隆々朝暾を吐出し、冠島沓島は眼前に橫はり、胸中濶然欣抃歡呼覺ずず拍手神島を遙拜し、各自に感謝祈願の祝詞を奏上し奉る。海上は至極平穩で、縮緬の樣な波が奇麗に流れて居る。水夫は汗水になつて力限り艪と舳とから漕ぎ付ける。小舟は矢を射る如く、鳥の翔つ如く冠島へ着いたのは恰度六時に五分前であつた。

何時でも片道に十時間以上十二時間はかゝるものを、今回に限つて僅に四時間足らずとは實に意外であつた。喜樂は得意滿面に溢れて

喜樂「罪の輕い安閑坊が參拜すると此通りだ、神樣は公平無私で在らせられる」

と一人で調子に乘つて居る。冠裝束いかめしく徐々神前に進み、供物を献じ、祝詞を奏し、拜禮了つて、恭しく社殿を罷りさがつた。記念の爲に自分は神前の丸石を一個頂戴した。勿論交換の石を持參して居るのであるから、只頂戴したのではない、今

日は明神の祭日とて、前日から數名の氏子が社務所に出入りして、境内の掃除を行つて居る。

「早うから參詣でしたなア、マア一服なさい」と座を讓る親切を厚く感謝しつゝ、再海濱の般繫場に引返した。名木の冠島桑は去年の夏、或者の爲に盜伐されて了つて影も止めず、僅に三尺許り周つた桑樹が波打際に根こじに古自て橫たへられてある。實に憤慨に堪へぬ次第である。

「一昨年あたりから、橫濱や神戸あたりから六七十人の團体がやつて來て、五六十万羽の鯖鳥を密獵したので、近頃は大變に鳥が減つて、漁獵に差支て皆の者が困つとるわいの」

と水夫二人が悲しさうに物語りつゝ、早くも沓島に向つて漕出した。

冠島沓島の中津神岩には數十羽の沖つ鳥、胸慧る妻羽たゝきも此し宜しと流し目に一行の舟を見送つて居る。淺久里、棚の下の巖壁を面白く左手に眺めて、諸鳥の囀る聲は鐘の岩の眞下に漕ぎつけた。奇絶壯絶胸爲に清涼を覺ゆ。

去る明治三十四年、見渡せば山野は靄靉として花の香に匂ひ、淡糊を解いて流したやうな春霞はパノラマの如き景色の配合を調和して、鳥は新綠の梢に囀ひ、蝶は黃金の菜の花に舞うてゐる好時節、舞鶴の海は白波のゆるやかに轉び來つて、遠きは黃に近きは白く、それが日光に反射して、水蒸氣の多い春の海を綠取つて、得も言はれぬ絕景天下泰平の眞最中、出口敎祖は三十五名の敎弟を引連れられて、此鐘岩の絕頂に登り立ち、丹後國宮川の上流、天岩戸の產水と龍宮館の眞清水を汲み來られ、眼下の海原見かけて、恭しく撒布し玉ひ、祝して仰せらるゝやう

教祖「向後三年の後には必ず日露の開戰がある。其時は巨人の如き强大國と小兒の如き小國とが、世界列國環視の下で、所謂晴れの場所、檜舞臺の上での腕比べの大戰爭であるから、萬々一不幸にして我國が不利の戰爭に終るやうな事になつたら、それこそ大變、萬劫末代日本帝國の頭が上らぬ。そこで國祖の神靈大に之を憂慮し玉ひ、今此老軀をこゝに遣はし、世界平和の爲、日東帝國の國威宣揚の爲祈願せさせ玉ふなり、あゝ艮の大金神國常立尊よ、仰ぎ願はくは太平洋の如く廣く、日本海の如く深き御庇護を我神國日本の上に降し玉ひて、此清げき產水と美はしき眞清水の海洋を一周し、雲となり、雨となり、或は雪となり霰となつて、普く五大洲を潤はし、天下の曲靈を掃蕩し、汚穢を洗滌し、天國を地上に建設し、豐葦原の瑞穗國をして、眞の樂境となさしめ、黃金世界を現出せしめ玉へ」

と隣腔の熱誠と信仰をこめ、天地も崩るゝ許りの大音聲を振り上げて祈願されし斷岩は卽ち此れであると、喜樂の談を聞いた一行は、是非一度登岩して見たき一念期せずしてムラ〳〵と湧起し、矢も楯も堪らぬやうになつた。

水夫を賴んでカッ〳〵にも舟を着けて貰ひ、かき登つて見ると、手足がワナ〳〵するやうな心地がして敎祖の勇氣に充たせられて居られることを、今更のやうに感歎せずには居られぬやうになつた。音に名高き彌勒菩薩は自然岩に嚴然として其英姿を顯はし、恰も巨人が豆の如き人間を眼下に睥睨して居るやうで、さこともなく神聖不可犯の趣が拜まれる。遠く目を東北に放てば日本海の波浪は銀屏を連ねたるが如く、黃金の大塊東天に輝き、足下の海は翠絹の褥の如く美絕壯絕快感譬ふるに物なし歎賞久うして再舟に上り、鰐の巢突當岩を巡見するに、奇又奇、怪又怪、妙と手を

拍ち、絶と叫び、精神恍惚として羽登化仙したるの思ひであつた。

舟は容赦もなく鬼岩の眼下を脱け出で、辛うじて戸隠岩に漕付いた。到着早々癪にさわつたのは、不屈き至極にも斯かる神聖なる神島にまで、密獵者が入込み、少し許りの平地を卜して藁小屋を結び、雨露を凌ぎつゝ、日夜鳥網を張りまはし、棍棒を携帯し、垢面八字髭を貯へた見ても恐ろしい樣子、腹でも空いたら人間でも容赦なく餌食にし兼ねじき五十男が、張本人と見られて、數多の壯丁を使役して頻りに信天翁を捕獲して居た眞最中であつたが、彼等は敎服姿の我等一行を遙見して、何故か右往左往とあわてふためき、山上見かけて騙け登るあり、斷岩を無暗に疾走するあり、何事の起りたるかと怪しまるゝ程であつた。稍落付顏の一人を近く招いて

喜樂「あなた等は何を以てか俄にあわて迷ふぞ。自分等は信仰上より梅雨を冒して今此神島に參詣した者だが、見ればあんた等は海鳥の密獵者と見られるが、併し商賣とは云ひ乍ら、かゝる危險な殺伐な所業を止めて、他の正業に就き玉へ」

と三人は熱誠を籠めて說き諭せ共、固より虎狼の如き人物、一言も耳に入り相な氣配だにない。「自由の權構てなやホッチッチ」と言はぬ許りの面構へ、要らぬ奴が來やがつて、人をビックリさしやがつたが、マア裁判官でなくて大安心……と口走つたのは滑稽の極みであつた。抑も昨年來出口敎祖は冠島沓島の密獵を非常に惜まれ、且つ罪もなき鳥族の徒に生命を奪はるゝを憐み玉ひ、鳥族保護の祈願まで、朝夕神前にて御執行あつたが、本日は滿願の日なれば、神明へ謝禮の爲に種々の供物を持たせ、自分等を特に御差遣になつたのである。それが又偶然か神の攝理か、不可思議にも今日卽ち明治四十二年六月廿二日、京都府告示第三百十九號を以て、加佐郡西大浦村大

字三濱小橋及此兩島の區域を禁獵區域となし、今後十年間は年内を通じて該區域内に棲息する鳥類及び雛の捕獲又は採卵を禁止せられた當日であつた。

十年以前に出口教祖の建設せられた神祠は積年の風雨に曝されて、半朽廢に歸し、見るからに畏れ多く、一日も早く改築し奉りたく、是非來春までに造營せんことを神前に祈誓した。畏み愼み祠前に進み、各自に供物を献じ燈火を奉點し、例の祝詞を奏上し奉る。捕り殘された數万の信天翁は不遠慮に自分等齋員の頭上を飛びまはり、神聖なる教服の袖に糞汁の雨を降らせ、一帳羅を臺無しにする。まだ其上に業のわいた氣樂相に怪しい聲を絞り出して、八釜しく、自分等を嘲笑して居る樣に、心の勢か、感じられるのである。それから肝を投出して、お籠り岩に辛うじて歩を進めた。

見れば上は絶壁に隔てられ、眼下は深き谷底に海水が青く漂うて物凄い。足の裏がウヂ〳〵するやうな難所に、教祖の眞筆を以て歴然と神の御名が記されてある。教祖の豪膽と熱誠に感じて、思はず拍手九拜感歎の聲口をついて出て來た。始終沈默を守つて居た大槻「日露戰役の眞最中、教祖のお伴をしてて十三ケ日間此岩窟に靜座し、敵艦全滅、」大槻

我軍全勝の祈願をこらした時は、ズイ分困窮を極めた。清水は一滴も無し、三人の中へ僅か三、升の煎米がある丈、これを生命の親として、幾十日も食はねばならぬ、晝夜にドン〳〵〳〵と怪しい、何とも譬ゐやうの無い音がして寂しいやら、凄じい樣で。人心地はせず、陸上との交通は無論斷絶なり、雨は毎日毎夜動務の樣に降り續ける、喉はかはく、腹はすく、手足はワナ〳〵する、目はマク〳〵する、腹はガク〳〵して、死んでるのか生きてるのか、吾乍ら終には判別が付きかねる。そこへ

雨育ちの體を俄の暑熱に當てられる。思ひ出してもゾッとする。敎祖は平素の修行の結果にや、神色自若として容顏麗しく、ます〳〵元氣が增許り、二十日や三十日の辛抱が出來ぬ樣では、日本男兒の本領はどこに在るか、チと勇氣を出したが宜からうと御叱りになる、自分等はモウ此上一片の勇氣も精力も出すことが出來ぬのである。然るに天の奥へか向ふの岸に濶りおつる水に鹽氣がないと云ふ事を、フト發見した。恰も地下の世界から脫出た樣な心持で、色々と工夫をこらし、携へ持てる竹筒を受けて水を取り、漸く渴を醫したといふ始末で、万一此水が無かつたなら、自分等は生命を全うすることが出來なかつたかも知れぬのであつた。併し一時は水で息をしたが何時迄も水許りでは堪らない。煎米はモウ三日前に終りを告げた。斯んな無人島に居て死ぬよりも、陸上にあつて幾らでも國家の爲に盡すことが出來るであらうから、一日も早く歸らせて貰ひたいと敎祖に泣きついた所が、敎祖も可愛想に思召したか、……そんなら明日は迎への舟の來る樣に神界へ祈願してやらう……と仰せられ、早速御願になると、天祐か偶然か、但は島神聽許ましたか、翌朝旭の豐榮昇る頃、遙の海上より七隻の漁舟が沓島を見がけて漕ぎ寄せて來る。其時の嬉しさは死んでも忘れられないと思ひました。數名の漁夫は自分等三人の顏を熟視して、てつきり露探と誤認し、俄に顏色を變へて震ひ出し、……露人が一人に日本人が二人だ。恐ろしい迂濶に相手に成れないぞ……と互に目曳き、袖曳き、逃足早く逃げ歸らんとする。逃げ歸られては堪らないから、自分は手を合さぬ許りにして、事情を逐一說明して賴み込んだ。彼等も漸くの事に納得し、兎も角も舞鶴まで送つてくれることになつた。所が其甲斐もなく、漁夫は体よく口實を設けて、自

分等を安心させ、油斷させて置いて、一人も殘らず逃げ歸つて了つたのである。大方村役場へでも報告する爲であつたのでせう。そこで止むを得ず後野氏が斷岩を辷りおりて、鰐の巢まで危難を冒し、海水を泳ぎなぎして、鐘岩の眞下迄行つて見ると、一人の漁夫がそこに波浪を避けて糸を垂れ鯛を釣つて居る最中で、裸体の儘に立つて居る後野氏の姿を見てビックリし……生命知らずの馬鹿者奴、お前は鰐の巢窟を通つて來たなアと叫びつゝ、直に船に乘せて戸隱岩の眞下に漕ぎ寄せた。

教祖は漁夫に向ひ、厚く感謝せられ……さてバルチック艦隊も近日の中に對馬沖にて全滅するから安心ぢや、お前さんも村へ歸つて村の人に知らしてやつて安心させるがよい……と仰せられたが、果して其お言葉通り、七日程經つた所で、日本海の大海戰で、あの通りの大勝利、自分も其時は餘りの事で呆れました」

と懷舊談を切りにやつて居る。二人の水夫も話の尾に付いて

「私等も二人で此島へ御伴して參りましたが、教祖さんが……モウお前さん等は歸つてくれ、そして四十日目に船を持つて迎ひに來てくれ、万一居なかつたら、又四十日經つた所で來てくれ……と仰せられたが、こんな無人島に荒行なさるかと思へば、俄に悲しくなつて、二人共泣きました」

と朴訥な口から話して居る。歸路冠島の覗岩に舟を泛べて和布を刈り、貝や蟹を捕獲しつゝ、五丈岩三丈岩等の勝景を感賞しつゝ、順風に眞帆をあげ、歸りに就く。

正に午時であつた。

船中にて晝飯を喫し、舞鶴灣口の蕪、久里、博奕ケ崎、白黒岩も何時しか後に見て横波、南泊と進む程に、早松原にと差かゝれば、水夫は潔く

『田邊見たさに松原越せば、田邊がくしの霧が込む』

と唄ひ乍ら、廿二日の午後四時、大丹生屋へ安着した。

（大正一一、一〇、一七、谷、八、二七　松村眞澄錄）

瑞　月

東雲の空明け渡るほの見ねて
百鳥千鳥啼き叫ぶなり
艶やかに笑める林檎の頬の色
夜の明け方の空の樣なり

第一七章　旅裝（一C五四）

明治三十三年八月一日、喜樂は郷里なる穴太より義弟危篤の電報に接し、急ぎ故郷へ歸つた。案の如く大病で義弟なる西田元吉は重態である。早速神界へ祈願の上、全快すべきことを告げ、其翌々三日綾部へ歸つた。大本の布教者西田元致は此時始めて神の尊き事を知つて信仰に入つた。其動機には實に面白い次第あれど稿を更めて口述することとする。

さて綾部へ歸つて見ると、門口に喜樂の荷物一切が荒縄や古新聞で包んで、放り出してある。不思議に思つて四方春三を呼んで、誰が斯んな事をしたのかと尋ねると、彼は顏色を變へて奥の間へ逃げ込んだ。益々不思議だと思つて四方祐助を呼んで委細

を聞くと斯うである。

鮎助「先生の御不在中に役員會議がありました。其時に四方春三さんが發起人で、あんな上田さんの樣な譯の分らぬ先生は、一日も早く追ひ返すがよい。天眼通も天耳通も何も彼も、皆上田さんの知つて居る事は、四方春三が皆覺らたから、今故郷へ歸つて居られるのを幸ひ、一時も早く荷物を穴太へ送つて、斷りに四方平藏さんが役員總代で行かれる處でありました。あなたの御歸りが一日遲かつたら、皆の役員さんの思惑が立つのに惜い事ぢや」

と頭を掻いて苦笑ひをして居る。そこで

喜樂「此事は敎祖さんは御承知か」

と尋ねると、

鮎助「イヱ〳〵あんたを先へ送つて了ふた上で敎祖樣に申上げるのです、前に敎祖樣に申上げたら、キット止められるは必定ぢや、あんな權太郎先生に永らく居つて貰つては、皆の役員が困るから、善は急げといふ事があると昨日から皆の者が位田の村上新之助さんの家で集會してます」

との事である。誠に油斷も隙もあつたものでない。又一方の四方春三は陰謀露顯に及んだので、何とか善後策を講ぜねばなるまいと、位田の村上宅へ自ら走つて報告した。反對者は驚愕の餘り施すべき手段がないので、とう〳〵山家村鷹栖の四方平藏方へ、謝罪して貰いたいと歎願に出かけた。平藏氏の取持で双方共に一先づ無事に治まるは治まつたが、機會さへあらば、上田を追出してやらうといふ考へは少しも放れなかつたのである。何れも皆金光敎會の敎師や役員や信者になつて居つた人々計りだから

金光教の守護神が憑つて、上田を排斥せんとするので其肉體は實に氣の毒なものである。

喜樂が斯道の爲に滿腔の熱誠をこめ、寢食を忘れて活動せる結果は大に功を奏し、日に月に隆盛に赴き、教祖も是非神勅なれば上田をして事務を總理せしめんとされたので、例の足立氏は憤怨惜く所を知らず、身は京都に在り乍ら、從來の部下を使嗾して百方排斥を試み、野心滿々たりし四方春三を旗頭となし、今回の横暴を繰返したるなるに、斯る重大事件を傍觀し居られし教祖の心事面白からずと、稍捨鉢氣分に成り居れる際、四方祐助の使を以て、教祖は上田を招かれたれば、心中に積み重なれる疑團を晴らすには好機逸す可からずと、直に廣前に參じ教祖に故郷の樣子などをお話し互に義弟の病氣の快方に向へることを喜び合つて居たが、中村竹造は奥の一間より御神諭を奉じて出で來り、さもおごそかに喜樂に向ひ

中村『今回教祖殿は此寒空に、何國へか神命を奉じて御修行に御出ましになり、御老體の身として御苦勞遊ばすこと、我々は何とも申樣がありません。是も全く上田さんの改心が出來んからであります。謹んでお筆先を拜讀きなされ。神樣や御國の爲に盡さんならん人が、病人位で郷里へ歸るなんて、實に神樣を輕しめて居られるのじや。人の一人や半分死んだつて、大切の御用に代へられますか、此筆先は今度教祖さんが御修行に御出ましなさる御神勅でありますぞ。改心の出來ぬ者は教祖の御伴叶ひませぬ。上田を伴れて行くことありますが、あなたのやうなお方のお出でになるべき所ぢやない。何程神勅でも、役員として御道の爲に、拙者が今回の御供は、生命に代へてもさせませぬ。其代りに拙者が及ばず乍ら御供仕る。上田さん如何で御

座る。只今教祖の前で御返答なされ。トコトン改心するから、御供をさして下さいと契約書を御書きなさい」

云々と中村氏は胸に一物ある事とて、口角泡を飛ばして上田に毒付いて居る。喜樂は聞かぬ顔して、横を向いて庭の面を眺めて居ると、教祖は中村氏に向ひ、

教祖「御神諭は上田さんの事ぢやと思ふたら違いますぜ、中村さんチと胸に手をおいて先日からの皆さんの行ひを考へて、取返ひを成さらんやうに……」

と一言柔かな針を入れられて、中村は首尾悪さうに教祖の前を下がり、御神諭を元の所へ納めて了つた限、物も言はず面ふくらしつゝ、足音高く疊ざわり荒々しく、自分の居間へ下つて了つた。

教祖は自ら座を立ち、神前の三寶の上に置かれたお筆先を手づから喜樂に渡された恭しく押戴いて直に其場で拝讀すると、御神文の中に

教祖「今度は普通の人間では行かれぬ處ぢや。實地の神の住居いたして居る、結構な所の怖い處である。皆の改心の爲に上田海潮、出口澄子、四方春三を連れ參るぞよ」

と記されてあるので、早速教祖に向つて嚴しく談判を吹きかけた。其理由は四方春三の御供に加はつて居ることである。彼は當年の夏頃より上田排斥の主謀者とも云ふべき人物で、西原と上谷の間の峻坂にて上田を○○せんとなしたる如き佞人である。それでも寛仁大度の我々は神直日大直日に見直し聞直し宣直して赦して置いたにも係はらず、又々今回我歸郷中に大排斥運動の原動力となつて駈廻つて居る。然るに世界の善惡正邪を透見し玉ふ艮の金神様が彼をお共に加へられるとは如何しても合點が出來ぬ、艮金神さんは良い加減な神さんだ、彼の如き者と同行するは恰も送り狼

と道づれになるやうなものだ。それを知つて同行させると神から言はれるのは、要するに上田を排斥されたのであらう。表面は体裁を良くし、裏面には上田を同行させない御神意であらうから、今度の御伴は御免蒙りたい……と稍憤怒の情を以て教祖に肉迫した。そうすると教祖は

教祖「イエ〳〵決して其様な主意ではありませぬ。最早此通り旅立の用意も出來て居りますから、今度は是非同行して貰はねばなりませぬ」

と簑笠に杖草履など準備の出來上つたのを、見せられたので、漸く得心して御供することにした。其日は八月の七日であつた。教祖は尙も上田に向ひ、

教祖「海潮さん、一寸裏口を開けて御覽なさい、恐ろしい事がありますからよく見ておいて下されや。皆戒めの爲ぢやと神様が仰有りますぜ」

との言である。何となく氣味が惡いので側に居た四方祐助と四方春三とを誘うて、裏口の障子を開放して見たが、教祖の言はれたやうな恐ろしいものは一つも見當らぬ。何の事か合點がゆかぬので、三人がそこらをキョロ〳〵見廻して居ると、裏口の柿の木の下に蚯蚓が一筋這うて居る斗り、暫時經つと一疋の殿蛙が勢よく飛んで來たかと思ふと、矢庭に其蚯蚓を呑んで了うた。其後へ又黑い可なり太い蛇が出て來て、其蛙を一呑みにして了うた。併し別に異位の事が何恐ろしいものかと思つて三人が熟視してゐると、平素上田が寵愛して居るお長といふ雌猫が走つて來て其蛇を嚙み殺して了うたと見る間に、何處から來たか、黑色の大猫がお長を嚙殺さんとする。お長は驚いて直に柿の木へ逃げ登つた。黑猫も亦續いてお長の跡を追うて柿の木へ登つた。上田はお長を助けたさに柿の木へ續いて攀登つたが、一の枝まで上つた頃、お長は黑猫

に嚙まれて、悲しい聲を出して、高い枝の上から地上に墜落しふんのびて鳴いてゐる上田はお長の仇敵と一生懸命になつて黒猫をゆり落さうとしたが、何うしても落ちんので、止むを得ず下へおりて見ると、上田の新しい浴衣の白いのが、猫の糞まぶれになつて居た。三人は始めて……あ、上に上のあるものぢや、如何にも恐ろしい事ぢや……と肌に粟粒が生ずる程に驚いた。其時教祖はニコ〳〵し乍ら三人の前に現はれ

教祖「これで何事も分りませう」

と言はれたが、其時には餘り深く教祖の御言葉も心にとめなかつたけれど、後に至つて其理由が判明したのである。

（大正一一、一〇、一八、舊八、二八、松村眞澄錄）

第四篇　靈火山妖

第一八章　鞍馬山（一）（一〇五五）

世は浮薄に流れ、人は狡猾に陷り剛毅昂直の氣淪滅し、勇壯快濶の風軟化して因循姑息となり、野鄙惰弱と變じ、虛誕百出詐僞自在に行はれ、或は囁嚅笑談他の意に投合するを勉め、巧言令色頭を垂れ腰を曲げ、以て其慾を滿たさんとするの卑劣と無節操は、社會の全體に瀰蔓し、我神州神民たるの高尙優美の氣骨雅量を存せず、國民の基礎たるべき青年は概ね糸竹管絃の響きに心耳を蕩かし、婀娜嬋妍たる花顏柳腰に眩惑せられ、奢移嬉逸の慾を逞ふして空しく有爲の歲月を經過する者のみ。國家の前途如何を思ふの志士仁人無く、世は將に常暗ならむとするを深く憂慮し、神示のまにまに大本の敎祖は拔山蓋世の勇を振ひ、百折不撓の膽を發揮し、世道人心を振起せんと

上田海潮、出口澄子、四方春三の三名を従へ菅の小笠に莫蓙蓑、手には芳しき白梅の枝にて作りたる杖をつき草鞋脚絆に身を固め明治卅三年閏八月八日の午前の一時、正に廣前の門口を立出でんとする時、前夜より集まり來りし數多の役員信者等は各教祖の袖に縋り異口同音に『何卒途中までなりと見送らせ下さい』と泣きつゝ頼む者ばかりであつた。教祖も役員等が、しほらしき眞心はよく推知し居られたけれど、只管神様の命令を畏みて一人も許されなかつた。生別離苦の悲しさに何れも袖を絞りつゝ教祖が平素に於ける温言厚諭の情は、人を動かし、感ぜしめたのである。別れに臨んで、今更の如く其温容を慕ひ和氣に懐き恰も小兒の慈母に別るゝ如く焦れ慕ふたのである。さて教祖は梅の杖、海潮は雄松、澄子は雌松、春三は青竹の杖をつき乍ら何處を當ともなく從ひ行く。秋すでに深く木葉は色を變じて四尾の神山は漸く紅に黄雲十里肅然たるさまである。和知の清流は淙々として脚下に白布を曝し一行の前途を清むる如くに思はれた。須知山峠の峻坂を苦もなく登り、狹き山道を辿りつゝ行けば川合の大原神社、一行恭しく社前に跪座し、前途の幸運を祈願しつゝ枯木峠も漸く踏み越ゑて、今や榎木峠の絶頂に差しかゝらんとする時、前途にあたつて怪しき火光のチラ〳〵と燃ゆるを見とめた。海潮は盗賊どもの焚火をなして旅客の荷物を掠めんとして待ち構へ居るには非ずやと心も心ならず、不安の念に包まれ乍ら近づき見れば、豈圖らんや、會員の一人なる福林安之助が數多の役員信者を出し扳いてソッと旅裝を整へ、梅の杖まで用意して先へ廻つて待つてゐたのである。教祖一行の姿を見るや忽ち大地に跼伏し

福林『何卒今度のお伴をさして下さい。私は猿田彦となつて此處にお待申して居りまし

た。願はくば異例なれども猿田彦と思召、特別を以てお伴をお許し下さい」

と頻りに懇願して居る。敎祖は

敎祖「何事も神様の御命令なれば此三人の外には如何なる事情があるとも隨行して貰ふ譯には行きませぬ」

と固辭して動き玉ふ氣色だになかつた。福林は詮方なく〳〵腹の底から湧き出す涙と共に嘆願し、

福林「今此處で假令死ぬとも此まゝ家へは歸らぬ」

と容易に初心を變ずべくも見ねなかつた。海潮は其眞心を推し量りて氣の毒に堪へ兼ね、敎祖にいろ〳〵と賴んだ上、

海潮「今度に限つて破格を以て隨行と云はず荷物持ち人足として連れて行つて上げたら如何でせうか」

と賴んで見たゝ敎祖も其の誠意と熱心に感じられ漸く隨行を許された。福林は天にも登るが如く喜び勇み、雀躍し乍ら四人の荷物を棒もて手に擔ぎ、一行の後に跟いて行く事となつた。老の御足も健かに早くも酒賈志、三の宮に到れば東天明く旭日燦々たる處なれども、音に名高き丹波船井の霧の海に天地萬有包まれて、天の原射照り透らす日の大神の御影を拜する能はず、前途隊々として何と無く物悲しき心地がした。行程六里、槍山に達し會員坂原氏宅に暫時息を休め、須知、蒲生野や水戸峠を上りつ下りつ、觀音坂の頂上に辿り着き見れば、丹波名物の霧の海原何時しか拭ふが如く晴れ渡り、船井郡の一都會、花の園部や小向山、天神山は一眸の下に横たはり、佐保姫の錦織成す麗しさは、筆舌の克く盡す所にあらず、上村、淺田氏等の同居する木崎の川

原町に達した。偶〳〵一行の出修を知りて急ぎ出迎へ是非一夜泊りて旅の御疲勞を休められよと請ふ事最と懇なりし爲め彼の家に入る。間もなく中田、辻村の兩會員入り來り、教祖の居らるゝ前をも憚らず、何の挨拶も會釋も碌々せず、開口一番上村氏が平生の處置甚だ不公平なり、依つて我々は退會せんなどと不平を訴ふるので、座上の上村氏は大に怒り、これ又口を極めて彼が不謹愼にして豫てより深き野心を藏し、現在今お供の列に加はる四方春三等と氣脈を通じ、本會の瓦解を企てつゝありなど、双方意外の事のみ言ひ爭ひ、はては四方、中田を速かに除名せられ度し、然らざれば小子より退會すべし等、得手勝手の難問題を提出する。中田、辻村の兩人は一層憤激し

『否、上村こそ今回の瓦解の謀主にして、生等は只相談を受けたる迄にて始めより斯る反逆には贊成し難し、』と一言の許に跳つけた。それ故今日其眞相の暴露せん事を怖れ、先んずれば克く人を制すとの兵法を以て、反對に彼より生等を誣告するのである』

と逆捻に一本參る。互に負ず劣らず、爭論の何時果つべしとも見ねざれば、海潮は苦々しき事に思ひ、種々と理否を嚙分けて諭せども、固より敬神愛民の思想を有せざる頑迷不靈の製糞器、只神を估りて糊口の資に供するより外、他に一片の希望なきもの共なれば、濟度するには此上なく骨を折らざるべからざる、最も困つた厄介極まる代物であつた。

折柄庭前に嬉々として四頭の犬遊び、其狀誠に親睦にして羨ましい程である。何と思はれしか教祖は懷中より一片の食物を取出し、犬に投げ與へられしに、犬は忽ち爭奪搏噬を初め、恰も不俱戴天の親の仇に出會せしが如くである。教祖はこれを見て、人心

の奥底は大抵斯くの如しと微笑みし乍ら、匆々に此家を立出でんとせらるゝ時、上村は大に恐縮して曰く、生等の心は實に此犬のやうだと稍反省の意を表はしたが中田、辻村は却々承知せず、益々暴言を逞しふし、是非々々教祖の御入來を幸ひ、正邪黒白を判別されん事を强請して止まなかつた。これには海潮もほと〳〵持て餘し、本會の主義精神は一身一家の榮達名聞を企圖するに止まらず、國家的觀念を養ふにあるのに、汝等會員たるの本旨を忘れ教祖所角の苦行の首途を擁して、非違の裁斷を請はんとするは、實に時を誤りたる非禮の行爲なり、教祖多年の艱苦は實に汝等の如き會員を覺醒し正道に導かんが爲めのみ、今又六十有五歳の教祖が梅ヶ枝の一杖に身を託し、凛烈肌を劈かんとする寒天をめがけ何地を當ともなく神命の隨々、孤雁聲悲しく、暮雲に彷徨するが如く將に遠く出修されんとす、宜しく本然の私に還り教祖のお心を推察せば、斯くの如く見苦しき事をお耳に入れ申すべき場合に非ざるべし、と事を釋け、理を解きて諭せども、元來彼等は金光教の教師にして、自ら企て自ら爲すの勇なく、徒に他の覆轍に倣らひ、其糟粕を舐りて以て得たりと爲し、信者の爭奪にのみ餘念なかりし癖は容易に改まらず教祖の諭示も海潮の說得も寸効なく、中田、辻村の兩人は梟の夜食を取り外せし如く頬を澎らせ席を蹴立てて歸り、四方、福林もこれに從いて行つた。

教祖は上村氏等に慇懃なる謝詞を述べ、海潮、澄子を具して立ち出でられし故、上村氏も大橋までお見送りの爲めとて從ひ來つた。さて四方春三は中田方に至り頻りに何事か善からぬ事のみ呟きつゝ不興の顏色物凄く、口を極めて海潮を罵り是非排斥せずんば止まずと息捲く。福林氏は草臥たりとて中田が家に入るや、直に昇り口に打倒れ熟睡を裝ひつゝ狸の空寢入り、素知らぬ振にて彼等の密談を殘らず聞き取つた。少時あ

りて欠伸と共に起き上り、態と空惚けたる面を擦り乍ら敎祖は何處にありやと問へば中田「あの氣違ひ婆か、否狂長殿か、只今然も偉さうに上村氏を隨行させて出て行つたから大方大橋の詰邊りに今頃は迂路つゐて御座らう」

と會員にあるまじき言葉を弄するも、一味の四方は咎めもせず厭さうに福林を伴ひて敎祖の跡を追つかけた。夕陽は已に西山に沒し、黃昏の霧は一行を包まんとする。四方春三は

四方「夜の旅は危險ですし、さりとて旅費も豐ならず、むしろ中田氏に一迫しませう」

と云へば敎祖は少しく怒つて

敎祖「假令野宿をしても彼等の家に泊るのは厭ぢや」

とて氣色惡ければ、一行は不承々々に從ひ行く。小山、松原乘り越ゑて一里半行けば鳥羽の里、廣瀨も後に入木の町、月は照れども深更に入りて漸く入木の會合所福島氏方へ着いた。

（大正一一、一〇、一七、舊八、二七、北村隆光錄）

瑞月

黎明の光の空に浮彫りの
樣な雲片二ッ三ッ見ゆ
琴平の山の麓より照り出づる
白金光のまばゆくもある哉

第一九章　鞍馬山（二）（一〇五六）

折節當夜は入木會合所の祭神及び會場移轉式擧行日にて數多の會員參集し居たるに不意に敎祖一行の御立寄りと聞きて驚喜し俄に色めき立ちて上を下への大騒動、見るに見かねて敎祖は之を制し慇懃に挨拶あり。畏くも大神の奉齋所を遷座する大切な御式を輕卒に施行して神靈に非禮の罪を重ね、前以て詳細の報告も出願にも及ばざりし會員一同の不注意は今眼前に報うて來て氣の毒であつた。幸ひにも敎祖に祭主を懇願して移轉式を完了し、次に敎祖及び海潮の講話あり、午後十一時には各十二分の神德を忝なみ會員一同退散した。印度坊主は經が大切、自分等は明日が大事、夜更しは身の障りと狹い座敷に雜魚寢をなし、翌九日、旭日東山の端に圓顏を現はし給ふの頃、霧の流るゝ小川に手水を使ひ口嗽ぎ、恭しく神前に祈願を凝らし、行途の如何を占なひ奉る。時に皇神海潮の手を通じて敎へ諭し給ふ樣

「世の中の人の心のくらま山、
神の靈火に開くこの道」

と、此神詠によりて行途の城州鞍馬山なる事を窺ひ知り得たれば、心は五條橋の牛若丸の如く飛び立つばかり勇み立ち、午後一時福島氏に送られて入木停車場へと歩を運ぶ。折柄園部の上り列車、幸宜しく飛來れば二分停車の忙しく渡る鐵橋寅天の、音轟々と大堰川、八木の城山跡に見て、二條の軌道を疾驅して、早くも龜岡に接近す。海潮が故郷なる曾我部の連山は殊の外眼に立ち、高熊山の靈峰は彼方ならんと思へば不知不識に拍手せられる。愛宕の神峰は群山重疊の其中央に魏然として聳ち、敎祖一行の

出修を眺めて山靈行途の安全成功を暗祈默禱せらるゝの思ひがある。車中偶〻曾我部の里人某を見る。言葉を掛けんとすれば態と素知らぬ振りに背面し、時々横目に此方の身邊を覗ふ樣、あまり心地良きものに非ず。彼は曾て海潮が故郷にありて國家の大勢に鑑み、憂國の至情を以て一身一家を抛ち、惟神の大道たる皇道靈學の敎旗を飜したる時、陰に陽に極力妨害を加へたる枉津神なれば、今更面目なくて其鐵面皮も稍良心に呵責され、思はず背面せしならんかと思ひしに、豈圖らんや、然は無くて彼は余等一行の旅裝を注視し、乞食巡禮に零落せしものと誤認し、歸郷するや嗤笑して告げて曰く

「上田は怪しき敎に沈溺せし爲め終に乞食に墮落したり。神道に熱中するもの宜しくこれを以て殷鑑とし、決して祖先傳來遵奉し來りし佛道を捨て神道に迷ふが如き愚舉を演ずる勿れ。彼れ上田は親族には絶交せられ、朋友には疎まれ、弟妹には見離され、我住み馴れし戀しき故郷を捨てゝ是非もなく〳〵他所へ流浪し、今又養家の老母や妻を携へ、浮雲流水の身となり居れり」

などと、御苦勞にも惡言醜語を遠近に觸れまはし、余が郷里の一族も少からぬ迷惑を感じたと云ふことである。

日本神國に生を享け、神國の粟を喰み、神恩に浴し乍ら、報本反始の本義を忘れて邪敎に魅せられたる印度靈の小人の言葉程、迂愚頑迷にして斯道に害毒を流すものはない。

汽車は容赦なく山本、請田を進み行き、第一隧道を潛り抜け第二、三、四と貫く程に、流れも清き保津川の激潭、急流に散在する奇石怪岩面白く、讀み盡されぬ書物岩

數へ盡せぬ算盤岩、激潭飛瀑の中に立ち並ぶ屏風岩、佛者の隨喜渴仰する蓮華岩を川底に見降しつゝ、溪間の鐵橋矢を射る如く、早くも嵐峽舘の温泉場、感賞間もなく君が代を萬代祝ふ龜山隧道、脫け出れば花より團子の嵯峨の驛。五分停車の其内に、右手の方を眺むれば、月雪花と楓の嵐山、秋季に花は無けれども、松の木の間を彩る錦、神の隨々崩出でゝ、月照り渡る渡月橋、筏流るゝ桂川、お半長右衛門浮名を流す涙川、流れも清き天龍の、巨刹は松年蒼伯の筆に成る天龍と共に高く莢を雲表に現はし、峨山の禪風薫るあり。十三詣りの虛空藏の祠、千歳榮ゆる松尾大社、神德薫る梅の宮の森、千葉の葛野を眺むれば、百千足屋庭も見に、國の秀見ゆる勇ましさ。左手は撰歌に名高き定家郷の小倉山、花と紅葉の二尊院、佛祖を祀つた釋迦の堂、北は御室の仁和寺、五重の塔は雲を突く。茲に昇降する客の大半はこれに詣づる信徒なるべし

汽笛の聲に動き出す。汽車は間もなく花園驛、車掌が明くる戸を待ち兼ねて一行は飛降り、禪宗の本山妙心寺を横手に眺めつゝ、敎祖は老の御足に似もやらず一行の先に立ちて進まれ、徒歩にて北野の鳥居前にと衝立つ梅松竹の杖。今日は陽曆廿五日當社の祭典にて神輿渡御の眞最中、騎馬の神職は冠裝束嚴めしく劉曉たる音樂に連れて、神輿の前後を練り出る有樣、最殊勝に見ゆる。數万の賽者は一時に容を改め襟を正して拍手するあり。社頭には千年の老松梅林・楓雜木も苔蒸して神さび立てる神々しさ。敎祖は此處に歩を停め拍手再拜の後、余等一行に向ひ

敎祖『抑も當社の祭神は今より一千餘年の昔、左大臣藤原時平が讒言に由つて時の帝王の逆鱗に觸れ、無實の罪に問はせられ親子共に四方へ流謫の身となり、御無念やる方なく

天の下乾ける程のなければや
着てし濡衣ひる由もなき

と歎き給ひし菅原道眞公の眞心、終に天地に貫徹し、鳴神とまで化けて神異靈德を顯はし一陽來復の時至つて北野大神と祭られ後世までも斯くも手厚き官祭に與り給ふは、實に聖明の世の賜と云ふべし。然し乍らこゝに思ひ出されて忍び難きは吾等の奉仕する艮の大神國常立尊の御上である。大神は天地開闢の太初にあたり、海月なす漂へる國土を修理固成して豐葦原の瑞穗の國を建設し、以て神人安住の基礎を立て嚴格なる神政を勵行し給ふや、剛直峻正にして柔弱なる萬神の忌憚する所となり、衆議の結果惡鬼邪神と貶せられ千座の置戸を負ひて神域の外に神退ひに退はれて其尊身を隱し、千萬の御無念、克く忍び克く堪へ天地の諸靈を守護し給へ

も、盲千人目明一人の現社會に誰かりて神名を稱へ奉る者なく、神饌一回獻ずる人無く、暗黑裡に血涙を呑み落武者の悲境に在せ給ひしに、時節到來、大神の至誠は天地に通じ、煎豆に花の咲き出でしが如く月日並びて治まれる、二十五年の正月元朝寅の刻、天津神の任しのまに〳〵

「三千世界一度に開く梅の花、艮の金神の世になりたぞよ。須彌仙山に腰を掛け丑寅の金神守るぞよ」

と大歡喜と大抱負とを以て目出度く產聲を擧げ、再び現在の主宰とならせ給へり。

あゝ斯くも至尊至貴至仁至愛なる大神の御心を察し奉りて一日も早く片時も速に、大神の假宮なりとも造營し奉り我神洲神民として敬神愛民の至誠を養ひ神恩の忝けなきを覺悟せしめ、日本魂を錬磨修養せしめねば、邦家の前途は實に寒

心に堪へず。瞬時も速かに大慈大悲の大神の御洪徳を宣傳し、惡鬼邪神との寃罪を雪ぎ奉るは吾等の大責任にして又畢生必ず決行せざるべからざる大願なり。今や北野の神の官祭を拜して大神の御上を追懷し、悲歎遣る瀨なし」

と云ひたる御聲は彌〻曇り光眼瞬く事切りと見受られ……草枕旅には厭ふ村時雨はら〳〵かゝるを袖にうけつゝ語り出でらるゝ其眞情に絆されて、海潮も澄子も聲をのみ、貰ひ泣きせし其顏を、菅の小笠に隱して同行五人杖を曳いて鞍馬を指して急ぎ行く。

鞍馬へ愈〻到着してより其夜は御宮の前にて御通夜する事とした。四方春三は寺前に備へありし御籤を頂きしに餘程惡かりしと見ゐ、思はず

春三「オウ失敗つた」

なぜと口外する。其夜福林は旅の疲勞にて前後不覺の体に寢入りしが、不圖夜中の一時頃目を覺まし見れば、傍にありし四方春三の姿の見ゐざるに驚き、探し見るに外の方に當つて「起きて下さい」と頻りに呼はる聲の聞ゆるまゝに耳をすませば確に四方の聲である。福林は急ぎ外へ出て見れば大いなる火の玉、お宮の前を行きつ戻りつ驅けめぐり、而も其火の玉の尾には正しく尋ねる四方春三の姿あるを認め、今の聲の所在も始めてわかつた。薄氣味惡く見守る內、火の玉は次第に先方へ行きし故恐る恐るも其方角へ行きて見れば四方は大きな焚火をして居た。福林は近づいて

福林「一体如何したのか」

と聞けば四方は靑い顏して震へ乍ら

四方「オ、恐い〳〵、こんなに恐い事はない、今のを見て吳れたら何も云ふ事は無い」

と云ふのみにて打ち明けもせず泣いて居る。それから連れ立ちて御宮へ戻り再び寢に就き、夜明けてから更めて四方に夜半の出來事を尋ねたけれど、四方は何も知らぬと云ふ。念の爲め昨夜焚火せる處へ行つて見たが其跡さへ無き不思議に福林は只驚くばかりであつた。海潮は敎祖に向ひ今度鞍馬參りの神慮を伺ひしに、敎祖は只

敎祖「先に行つたら分りませう」

と云はれしのみであつた。

歸途は京都より園部へ出で入木にて一泊せしが四方は終日蒼白な顏して悄氣込み居たりし樣見るも憐れであつた。同人は其夜園部まで二里の行程を走つて友人に會ひ

四方「今度は死ぬやも知れぬ」

と嘆乞ひを成して歸れる由、敎祖は此事を聞きて叱つてゐられた。

翌日綾部の役員信者は途中迄出迎ひに出て無事大廣前に歸り着く。四方春三は始終太息を洩らし居たが上谷の宅より迎ひに來り、歸宅して後一ケ月ほど煩ひて歸幽して了つた。其より前

四方「生前是非先生に一度來て貰はねば死ぬにも死なれぬ」

と使ひが來たから海潮は見舞に行き

海潮「許してやる」

と言へば安心して歸幽した。春三時に十八才、實に靈學に達したる男であつたが慢心取違ひの末、神罰を蒙りて一命を終つたのは遺憾の事であつた。

或夜俄に大風吹きて廣前の杉の樹、ゴウ〳〵と唸りし事がある。後敎祖に伺ひしに鞍馬山の大僧正來りて本宮山へ鎭まり又其眷族は馬場の大杉へ行つたが其後大杉には

蜂の如く澤山の眷族が見ゐたと教祖は物語られた。

（大正一一、一〇、一八、舊八、二八、北村隆光録）

瑞　月

清澄な黄金の空に禽鳥の
いとも妙なる琴囀の聲
天も地も人も怒りて常暗の
空晴らさんと風雨雷鳴

第二〇章　元伊勢（一〇五七）

明治三十四年舊四月二十八日、元伊勢の御水の御用があつた。世界廣しと云へども生粹の水晶の御水と云ふのは、實に元伊勢の天の岩戸の産盥産釜の御水より外には無いので、其水晶の御水を汲んで來ねばならぬと云ふ御筆先が舊三月一日に出たのである。

「艮の金神の指圖でないと此水は滅多に汲みには行けんのであるぞよ。此神が許しを出したら何處からも指一本さへるものもないぞよ」

と云ふ意味の御筆先である。極めて大切な御用であるから、六日前に木下慶太郎が調べに行つて來た。此水は昔から汲取禁制の御水で万一禁を犯した場合は必ず大風大洪

水が起ると傳へられ、何人も觸れる事の出來ぬ樣に特に神官が見張をして居るのみならず、上の方から見下した處では小さい流れがあつて、二間ばかりの板を渡さねば行かれないと云ふ事まで確めて歸つて來たのである。愈當日になつて敎祖の外海潮、澄子を初め一行四十二名、菅笠、莫蓙簑の扮裝、御水を汲み取る爲に後野市太郎が拵へし青竹の一節の筒二本を携帶して出發した。丹後の內宮の松代屋に着いて一行は打ち寬ろぎ、前に木下が調べし通り神官が見張つて居つては汲む事が出來ないから、先づ森津由松に命じて樣子を見屆けにやつた。日が暮れかけたので、見張の神官が內へ引上げるのを見屆けて森津は早速報告に引返した。草鞋もとかずに森津の報告を待ち兼て居た、木下慶太郎は例の用意して置いた青竹の筒二本を携へて大急ぎで岩戸へ驅けつけた。六日前に調べた時に見て置いた小さな流には大きな朽木が流れ寄つて橫はつて居つたので、これ幸ひと渡つて行つた。そして產盥と產釜の水を青竹の筒の中へ杓子で汲取るのであるが筒の穴が小い爲め、仲々手早く濟まず、愚圖々々しては邪魔が這入つては今度の大切の御用が勤まらぬと心得た木下は、二本の筒を兩手に持つて矢庭にヅブ〳〵と突込んで、漸く水が一杯になつたので安心して松代屋へ引揚げた。一行は風呂から上つて夕食の最中であつたが首尾よく御用を勤めた事を申し上げると、敎祖は非常に喜ばれた。そして木下は大きな朽木の橋の事を申上げると敎祖はそれは正しく龍神樣であると云はれた。翌日は御禮參りに行つて夕方五時出立、夜徹し歩いて歸つたが、綾部へ歸るまで何の御用をして來たか知らぬ者さへ多かつた。

汲んで來た生粹の水晶の御水は神樣に御供へして其御下りを皆で少しづゝ戴き、大本の井戸と元屋敷の角藏氏方の井戸と四方源之助氏宅の井戸とへ五勺ほどを殘りは丹

後の沓島冠島の眞中卽ち龍宮海へさせとの敎祖の吩咐であつた。第一着に大本の井戸に入れたが敎祖は

敎祖「今に京都大阪あたりから此お水を頂きに來る樣になる」

と云はれたが今日では已に實現して居るのである。

元屋敷の井戸と云ふのは、西の石の宮の處の井戸で出口の元屋敷であるが、角藏に賣つたのであるから勝手にさす譯には行かぬので木下慶太郎の計らひで釣瓶繩が切れたから水を貰ひに來たのだと云つてさし込んで來たのである。元屋敷は後に角藏から買ひ戻して大本の所有になり、今日では石のお宮が立てゝある。四方源之助の內の井戸にも木下が同一筆法でさし込んで來た。これは今統務閣の側の井戸で現今では三つとも大本の有となつて居る。

此御水の御用が出來た頃、大本で三つの火の不思議があつた。お廣前のランプが落ちて大事になる所を漸く消し止めたが、それからまだ二三分間も經たぬ內に風呂場から火が出て、これ亦大事になる所を海潮が見付けて大騒ぎとなり漸く消し止めた。すると又役員の脊中へランプが落ちて危い所を無事に消しとめた。僅二三分の間に三つも火事沙汰が起つたので何か神慮のある事だらうと思つて居ると海潮は神懸りとなつて深い神慮を洩らされたのである。御水は後になつて役員信者が大勢で龍宮海へさしに行つた。此水が三年經てば世界中へ廻るから、そしたら世界が動き出すと云ふ事であつたが果して三年後には日露戰爭が始まつたのである。

（大正一一、一〇、一八、舊八、二八、北村隆光錄）

ひむがしの山をかすめて襲ひ來る
飛行機あはれもろくも墜落
遠雷の聲聞くさへも爆彈か
地震の音かと胸轟かす
ドンと云ふ聲聞き付けて爆彈よ
それ地震よと戦く江戸ッ子

第五篇　正信安信

第二一章　凄い權幕（一〇五八）

明治卅七年になつてから、日露戰爭が勃發したので、ソロ〳〵四方平藏、中村竹藏、村上房之助、木下慶太郎、田中善吉、本田作次郎、小島寅吉、安田莊次郎、四方與平、盧見じゆん、などの連中が俄に鼻息が荒くなり、六疊の離れに喜樂が閉ぢ込められ隱れて古事記を調べたり、靈界の消息を書いてゐると、中村竹藏が二三人の役人と共に大手をふつてやつて來た。そして喜樂に向ひ、

中村「會長さん如何です、大望が始まつたぢやありませんか、早く改心をなさらんと、今年中に世界は丸潰れになりますぞ、露國から始まりてもう一戰があるとお筆先に出て居りますだないか、ヘンこれでも筆先がちがひますかな、靈學三分筆先七分に

せいと、お筆先に出て居るのに、一寸も筆先をおよみにならんから、露國から戰が始つても何も分りますまいがな、この先はどうなるといふ事を御存じですか、早く教祖さんにお詫をなされ」

と威丈高になつて、說諭するやうな氣分で喋り立た。丁度宣戰の詔勅が下つた三日目である。そこで喜樂は自分の隨筆と題した一冊の書物を出して、中村に示し、

喜樂「そんな事はとうから分つてゐるのだ、これを見てくれ、明治卅五年の一月にチャンと明治卅七年の二月から日露戰爭が起るといふ事が自分の筆でかいてある」

とそこを廣げてつき出して見せると、中村は妙な顏をして、

中村「そんな角文字をまぜて、外國身魂で何程書いても、そんな事はこゝでは通用しません、何にも知らぬ學のない神力ばかりの教祖のお筆先が尊いのです」

と木で鼻をこすつた樣に、冷笑的に云ふ。そこで喜樂は

喜樂「お前は明治卅三年にも今年に日露戰爭が起るといひ、三十四年にも三十五年にも毎年、今年は日露戰爭が起る、立替が始まる、目も鼻もあかん事が出來るというて居つたぢやないか、そんな豫言でもしまひには當るもんだ」

といふと中村は威丈高になり、

中村「私は自分が言ふたのではない、勿体なくも艮大金神變性男子出口の神さまのお筆先に……今年は立替が始まる、露國との戰ひがある……と現はれて居るので、そういふたのです、つまり會長さんは教祖はんの仰有つた事や神さまの御言をこなすのですか、あなたの御改心が遲れた爲に御仕組がおくれたので御座いますぞ會長さんが明治卅三年に改心が出來て居つたら、神さまは三十三年に立替をなさる

なり、三十四年に改心が出來て居つたら、ヤツパリ三十四年に立替を遊ばす御仕組にチャンと三千年前から決まつて居ります、自分の改心がおくれて神さまに御迷惑をかけ、御仕組を延ばして、世界の人民を苦しめておき乍ら、神さまがウソを言ふたよに仰有るのですか、そんな事を仰有ると、綾部には居つて貰へません、何といつても露國と日本との戰爭が始まつたのですから、きつと日本は九分九りんまで、サア叶はんといふ所まで行ますぞ、そうなつた所で綾部の大本から艮金神變性男子の身魂が大出口の神と現れて、艮めをさして、三千世界をうでくり返し、天下太平に世を治めて、後は五六七の世松の世と遊ばすのですから、早く改心をして貰はんと、お仕組の邪魔になりますぞや、三千世界の立替立直しの御用の邪魔を致した者は、万劫末代書きのこして、見せしめに致して其身魂を根の國底の國へおとすぞよ……と神さまがお筆先にお示しになつて居りますぞや、會長さんの改心が一日遲れたら世界の人民が一日餘計苦しむといふ、あんたの身魂は極惡の身魂の因緣性來だから、何事も改心が一等ぞやとお筆に出て居ますぞね」

と脫線だらけの事を云ひ並べて攻め立てる。會長は可笑しさをこらへて、

喜樂「自分が一日早く改心した爲に三千世界の人間が一日早く助かるといふよな、善にもせよ惡にもせよ、そんな人物なら結構だが、自分等一人が如何なつた所で、世界に對して何の關係があるものか、餘り譯の分らん事を云ふもんぢやない、そんな事を云ふから、綾部の大本は、氣違の巢窟だとか、迷信家の寄會だとか、世界から惡罵されて、はねのけ者にされるのだ、チツとは考へて貰はんと困るぢやないか」

と言へば中村は口をとがらし、

中村『おだまりなされ海潮さん何程うまく化けても駄目です。世間から惡くいはれるのがそれ程氣にかゝりますかな、何と氣の小さい先生ですな、それだから變性女子は反對役だと神さんが仰有るのだ、世界中皆曇つて晝中に提灯を持つて歩かなならん暗がりの世の中になつてゐるのだやから、世界の人民にほめられるよな教がそれが誠ですかい、トコトン惡くいはれてトコトンよくなる仕組ですよ、餘りあんたは角文字や外國の教にこるから、サッパリ靈がねぢけて了うて、お筆先が分らんのだ。チッとお筆先を聞きなされ」

と呶なりつけ乍ら、恭しく三寶にのせて來た七八冊の筆先をよみ始め出した。

喜樂は頭が痛くなつて來て、氣分が惡くて仕方がない。そこで

喜樂『其筆先なら何べんも聞いて居るから、聞かして貰はいでもよい、何もかも知つてゐる』

というや否や、

中村『コラッ小松林、お筆先が苦しいか、サア是からお筆先攻にして退かしてやろ、サア早く小松林、此お筆先を聞いて、トットと會長さんの肉体を立去れ、そして其後へ變性女子の身魂坤の金神さまがお鎭まり遊ばすのだ、會長さんの肉体は、貴樣のよな四足の這入る肉体だないぞ、コラ退かんか』

と呶鳴りつける。村上や四方平藏が傍から、

村上『コラ小松林、何を愚圖々してゐるのだ、早く會長の肉體を飛出して、園部の内藤へしづまらんか、惡の靈の年の明きだぞ』

と三方から攻めかける。四方平藏は口を尖らして、

四方「コレ小松林さん、お前さんもよい加減に改心をなさつたら如何どすか、お前さんの改心が出來ん爲に、敎祖さまが有るに有られん苦勞をなされてムるなり、役員信者が日々心配をいたし世界の人民が大變に苦しんで居るじやないか、サア早く駿河の稻荷へ歸りなさい、こゝは稻荷のよな下郎の寄る所ぢやムいませんぞや、水晶魂の誠生粹の身魂斗り集つて御用を致す龍門館の高天原でムいますぞやー

ウン〳〵と手を組で、三方から鎭魂をする、どうにも斯うにも仕方がないので、會長は

喜樂「そんなら仕方がないから、小松林は今日限り、いんで了ふ、そして坤の金神さんに跡へ這入つて貰うて御用をして貰ひませう」

といふと、竹藏が

中村「コレ平藏さん、用心しなされや、又園部のよにだまされるかも知れませんで。惡神といふ奴は何處までもしぶとい奴だから、ウッカリしとると馬鹿にしられますで本當に小松林は改心しとるのだない、偉相に笑うて居るぢやありませんか、コラ小松林、そんな甘い事吐して、會長の肉體を使はうと思うても、此中村が承知をせんぞ、サア何ぞ證據を出せ、いよ〳〵會長の肉體を離れたといふ事を明かに示して、敎祖にお詫を致さんと、どこまでも許さんのだ。モウ斯うなつた以上は三日かゝつても、十日かゝつても、會長の肉體から放り出さなおかんのだい」

と四股をふんで雄健びをする、千言万語を盡くして諭せば諭す程反對にとり、どうにも、かうにも始末がつかぬやうになつて來た。そこへ八木から福島久子がやつて來て敎祖さんに挨拶をし、終つて慌たゞしく喜樂の前に來り、

久子「何とマア平藏さん、お筆先は恐れ入つたものでムいますな、とう〳〵露國と戰爭が起つたぢやおへんか、まだ會長さんは御改心が出來ませんのかい」

中村「コレは〳〵福島はんどすか、よう來て下さつた、神さまのお筆先は恐れ入つたもんどすな、こんな御大望が始つて居るのに、まだ小松林が頑張つて、會長さんの肉體を離れんので、今皆の役員がよつて說諭をしとるのどすが、中々どこ澁太うて聞いてくれませんワ、どうぞあんたも一つ言うてきかして下さいな」

と福島の辯舌家に應援をさせやうとかゝつてゐる。又こんな口喧しい女にとつつかまつては大變だと思ひ、便所へ行くやうな顏して、ソッと裏口から飛出し、西町の大槻鹿造の宅へ一目散に逃て行つた。

大槻鹿造とお米さんとの二人が喜樂の走つて行つたのを見て、

大槻「會長さん、又喧嘩が始まつたのかな」

と笑うてゐる。

喜樂「八木の福島が今やつて來よつたので、うるさいから逃げて來たのだ」

といふと大槻鹿造は

大槻「アハヽヽ又例の小松林さんかな、まあこゝに久子が八木へ歸る迄、ゆつくり泊りなさい。新宮の婆アさんも婆アさんだ、立替だの立直しだのと、第一それが私は氣に食はんのだ、大槻鹿造は大江山の酒呑童子のみたまだなんて、婆アさんが吐かすので、何奴も此奴も人を鬼扱ひにしやがつて、むかつくのむかつかんのつて、外の婆アぢやつたら、此鹿造も承知をせんのだけれど、何と云うてもお米や傳吉の母親なりするもんだから、辛抱してゐるのだ、本當にトボケ人足計り集まつたもんぢ

や、それよりも牛肉でもこゝでたいて食ひなさい、何れ久子か平藏か中村が捜しに來るに違ないから、牛肉の臭で往生さしてやるのも面白かろ」

と幸ひ牛肉屋を開業してゐるので、店から三百目ほど上等を持つて來て、裏の離れでグッ〳〵と煮いて食ひ始めた。そこへ中村が

中村「大槻さん、會長さんはもしやこゝへ見えては居りませんかな」

と裏口の方から尋ねて居る。鹿造はチッと耳が遠いので、明瞭分らなんだが、お米さんが、

お米「中村はんか、マア這入つて牛肉でも食ひなさい、今會長に牛肉をすゝめて食はしてる處ぢや、樫の實團子を食つたり、芋の葉のお粥を食つとるより、余程氣がきいてるで、こゝは大江山の酒呑童子と蛇との因縁の身魂の夫婦の所へ鬼三郎はんが來て居るのだから、みたま相應で牛肉を食て居るのだから、お前もチと鬼の仲間入したらどうぢや」

と揶揄うてゐる。中村は鼻をつまみ乍ら、顏しがめて這入つて來て、

中村「御免なはれ、大槻さん、あんたは敎祖はんの御總領娘を女房に持つたり、結構な御子を貰うて居り乍ら會長さんにそんな事を勸めて濟みますか、四ッ足を食はしたり、餘りぢやおへんか」

と不足らしく嘔鳴つてゐる。鹿造は笑ひ乍ら

大槻「今の世の中は一日でも甘い物喰て、好な事をするのが賢いのぢや、お前もチと改心して牛肉でも食て、元氣をつけ、古物商でもやつて金儲けをし、立波な着物を着て甘いものでも食つたらどうだ、何程善ぢやく〳〵というてお前等一人位がしやち

んなつても、誰も相手にする者がないぞ、會長さんは流石は能う分つとるワ、此時節に四足の肉が食へんの何のと、そんな馬鹿な事をいふ奴がどこにあるもんか、餘程よい阿呆だなア」

とからかひ半分に呶鳴つてゐる。お米さんは又お米さんで、

お米「コレ中村はん、お前は播摩屋の竹はんというて、隨分博奕もうち、女も拵へ、肉もドッサリ食た男ぢやが、そう俄に神さんにならうと思うたて、到底成れはせんぞね、あんな新宮の氣違婆アさんにトボけて居らずに、チト明日から牛肉でもかついで、そこら賣りに往つたら如何だい、誰か賣りにやらそうと思うてる處ぢやが、五圓がとこ賣つて來ると一圓位儲かるから、そしたらどうだな」

と厭がるのを知りつゝ態とにからかうてゐる。中村は蒼白な顔になり、

中村「兎も角會長さんを返して下され、大本の御用をなさる因縁の身魂だから、こんな所へ來て貰ふと、だん〳〵に身魂が曇つて仕方がないと教祖さんが仰有りました、サア會長さん早う去にませう」

と引張らうとする。會長は

喜樂「コレ中村はん、最前から牛肉を三百目かけて貰うて一人で食つて了うた、これは小松林が食たのだから、これから坤の金神さまに三百目程お供へしてから歸ぬから、教祖はんや、お久はんや、平藏さんに宜しうというといてくれ」

とワザとに切腹が立つので、からかうてみると中村は躍氣となり、

中村「どうも身魂の因縁といふものは仕方のないもんぢやな、惡の靈の所へはヤッパリ惡がよりたがると見ります」

といふのを聞咎めて、鹿造は

大槻「コレ中村、おれを鬼とは何だ、貴様に三文も損をかけた事もなし、貴様等に惡ことはいはれる筋があるか」

といふより早く、二つ三つポカ〳〵と拳骨をくれた。中村は、

中村「ナアに大和魂の生粹の、おれは身魂だから、酒呑童子の靈位に恐れるものか」

と言ひ乍らスタ〳〵と新宮さして歸つて了つた。さうかうして居る所へ、園部の淺井みのといふ支部長がやつて來て、それから此處にグズ〳〵して居つては又うるさいといふいで、お米さんに何事も頼んでおき、日の暮頃から、園部へ行つて隱れて布教することになつた。

（大正一一、一〇、一八、舊八、二八、松村眞澄錄）

第二二章　難症（一〇五九）

明治三十七八年頃は日露戰爭の勃發で四方平藏、中村竹造等十二人の所謂幹部役員は愈〻世の立替で、五六七の世になる。それまでに變性女子を改心をさしておかねばお仕組が遲れると、しやちになつて、信者の家を宣傳にまはり……會長が改心せず、又小松林の居る内は、門口の閾一つ跨げさす事はならん大變な神劇が當ると一生懸命に一軒も殘らず觸れ歩いてゐる。そしてどんな立派な事を會長が言うても、一つも聞いてはならん、小松林が艮金神さまの御仕組を取りに來てるのだから……とふれまはした。信者は一人も殘らず、熱心な十二人の活動で、彼等の云ふ事を固く信じて了ひ、且つ園部で狐の眞似したのが大變に祟つて、信者一般から四ッ足の守護神と思ひ

こまれたからたまらぬ、此時喜樂の云ふ事を聞いて布教に從事してゐた者は西田元敎と淺井はなといふ五十餘りの婆アさん二人のみであつた。

西田と淺井とは代る〳〵園部を十二時頃に立つて三里計り日をくらして綾部へやつて來て、大槻鹿造の家で、夜中ソッと會長と會見し、敎理を研究しては、又夜の間に園部へ歸り、園部を根據として、細々と宣傳をやつて居た。喜樂は意を決して、園部迄夜の間に淺井に伴れられて、逃げのび、船井郡や北桑田郡の信者未開の地を宣傳して居た。

片山源之助といふ材木屋がふと園部の支部へ參拜して來て、敎理を聞き、俄に信者となつて、幽齋の修行を始め、天眼通を修得し、旅順の要塞を透視したり、日露戰爭の始末を豫言したり、いろ〳〵と不思議な事が實現したので、非常に澤山の信者が集まつて來た。そうすると又もや綾部の連中が嗅つけやつて來て、澤山の信者の前で、

『會長は小松林といふ四ッ足の守護神が憑いとるのだから、相手になつては可けませんぞや、貧乏神ですから』

と吹聽する、片山の天眼通が呼物となつて澤山に信者が集まつて來た。そこへ綾部から來て、會長の惡口雜言を並べ立てるので、譯も知らぬ信者は一も二もなく信じて了ひ、會長を輕蔑し、片山先生〳〵と尊敬して、遂には會長を邪魔者扱ひにするやうになつて了つた。西田は大變に憤慨していろ〳〵と活動したけれ共、綾部の妨害が甚しいので、頽勢を挽回する事が出來なかつた。それから會長は再び綾部へ歸り、假名計りの敎典を作り、西田元敎に持たせて宣傳に歩かすことゝしてゐた。

再綾部へ歸り、離れの六疊に蟄居して教典を書いてゐると、又もや四方中村の幹部がやつて來て

中村「會長さん、行けば行く程茨室、神に反いて何なとして見よれ、一つも思惑は立ちは致さんぞよ、アフンとして靑い顏をして、家のすまくらに引つ込んで、人に顏もよう會はせず、消氣てゐるのを見るがいやさに、神がくどう氣をつけるぞよ……と現はれになつた筆先を實地に御覽になつたでせうな。そうだからどつこへも行くでないと仰有るのに、小松林の四ッ足にチョロまかされて、又しても〳〵、綾部を飛出しなさるもんだから、こんなザマに會うのです、モウこれからはどつこへも行かず教祖さんの御命令を聞いて役員の言ふ通りになされ、世界の人民が苦みますから」

と中村がそれみたか……といふやうな冷笑を浮かべて喋り出した。會長は

喜樂「ナニ、私は失敗したんでも何でもないワ、自分の心がお前に分るものか、細工は流々仕上げを見て貰はな分らんワイ」

と言はせも果てず、中村は大きな聲で

中村「コラ小松林、まだ改心を致さぬか、ッ、ボにおとしてやろか、慢心は大怪我の元だぞよ」

と嗔鳴りつける。四方平藏は側から

四方「會長さん、あんたの仰有る事も先になつたら又聞く時節が來ますから、今の所ではお氣に入らいでも辛抱して御用聞いて下され、今年來年が世界の大峠、グヅ〳〵してる時ぢやムいませんぞや、これ程御大望が差迫つて來て居るのに、大本の御用糧ともある人が、そこらをウロ〳〵とウロつきまわるとは何の事ですか、教祖さま

が、又何時もの病が出て小松林がそこら中へつれて歩くから、役員氣をつけよ……と嚴しう仰有るのですから、こうして皆の者があなた一人の事に付いて心配して居るのに、お前さんは我々役員が可哀相なとは思ひませんか」

と詰りよる。會長は

喜樂「お前等がトボけてるのが可哀相なから、早く目をさましてやろうと思うて、いろ〳〵と氣をつけるけれども、小松林の四ッ足が吐すのだなどといつて一口もきかず目をさましてくれんので、綾部に居つても用がないので、今の内に一つでも神界の御用をしておかうと思つて、そこら中を布教に歩くのだ、日露戰爭が起つても、それ位で世界の立替が出來るものでない、まだ〳〵世界の大戰爭があり、それから民族問題が起り、いろ〳〵雜多な事が世界に勃發して、最後にならねば立替は出て來るものぢやない、こゝ十年や二十年で、そう着々と埒があくものか、今の内にチッと目をさましておかんと、此戰爭は濟んで了ふなり、立替は出て來んなりすると、又虛言ぢやつたと言つて信者が一人も寄りつかなくなつて了ふ、つまりお前たちは一生懸命になつて神さまのお道を潰さうとかゝつてるやうなものだ」

といふのを皆まで聞かず、

「コレ會長さん、お前さん等が何程小賢しい理窟を並べても誰も聞く者はありませんぞ、一分一厘違はぬお筆先だと仰有る神さまの御言が違うてたまりますか」

などと頑張つて、一言も聞入れぬのみか、益々四ッ足扱ひを始めて始末に了へんので澄子と相談の上、何事も沈默を守り、一時の間も時間を惜んで、敎典を書き現はすことに全力を盡して居た。

そうした所が西田が一ぺん北桑田へ來てくれと秘かに頼みに來たので、何とかして又もや綾部を脱け出さうと考へて居た。幸に八木の祭典に出張する事となり、前に述べた如く八木を夜ぬけして、園部へ走り、それから人尾峠を乘越へて、宇氣といふ山里へ日の暮頃に落つき、安井清兵衛といふリウマチスで身体の自由を失ひ苦しんでゐる老爺さんの鎭魂をなし、其夜はそこで一泊する事となつた。西田が鎭魂をすると爺イさんは其場で足が立ち、座敷中を歩いて見て、大變に喜び、それから熱心な信者となつたが元來が村中でも受けの惡い親類の財産を併合して、財産家になつたやうな爺だから、金錢の執着心が甚うてモ一つといふ改心が出來んので、僅に室内を歩くよにはして貰つたが、まだ外へ出て働くまでにはならなんだ。そこで爺イさんが西田に對して言ふには、

安井「どうぞ私が山へ行けるよにして下さつたら、内の林の杉や檜の屑をさがして切つて、それで神さまのお祭り場所を建て、教會を開き、私が隱居の代りにお守をさして貰ふ」

と虫のよい事を言ひ出した。そこで元教が大變に腹を立て、

西田「神さまの御祭り場所を建てるのに、屑をよつて建てるといふ樣な事を云ふ爺イは嫌だ。一番よい木を上げるのが信神の道ぢやないか、そんな事言うとると、又元の通りいざりになつて、折角拵へた財産迄なくなつて了うぞ」

と云つたきり、サッサと安井の内を飛出し、それきり變屈人の西田は寄りつかんやうになつて了うた。果して此爺は元の通りの難病になり、慾にためた財産も息子の縫之助が人にだまされて、一獲千金のボロ儲けをせうとして大失敗をなし、財産の九分通

まで、三年ほどの間になくして了うた。

さて會長は西田と共に其時分これもリウマチで平太つて居た小西松元といふ男の内へ訪問して、暫く其家を根據として布教に從事してゐた。此小西は園部の支部へ駕籠に乘つて出て來て、西田の鎭魂で卽座に足が立ち、大變に喜んで、材木などを献納し支部の擴張までやつた位な熱心家であつた。此小西は川漁が大變上手で寒中でも一寸出て來ると、三升や五升の川魚をとつて來る河童と仇名をつけられて居る酒飲み爺である。毎日三升位は平氣で平げて、朝から晩まで女を相手に酒を呑んで居つた。西田が小西の病氣を直した時今後は決して魚をとつてはいかぬ、そして酒を二三年呑まんやうにせんと今度はリウマチ所か中風になつて了ふと注意しておいたのも聞かずに、寒の内に網を持つて宇津の川原へ籠り魚を掬ひに行つて、柳のヌッと川へ出た、幹からふみ外し、川へドンブとおち込み、再び大熱を發し、元の通りにリウマチになり、晝夜間斷なくウン〳〵唸つて苦んでゐた。そこで西田が再び鎭魂をして餘程よくなつたが併し、足の痛みが止まつた丈で、行歩の自由が叶はぬ。そこで喜樂を綾部から引出し、小西の鎭魂をして貰ひ、病氣を本復させて、神さまの御用に使はうとしたのであつた。喜樂は西田と二人で小西の内へ尋ねてゆくと、小西は宮村の内田官吉といふ弟の家に世話になり、藥風呂をわかして養生をし乍ら、神さまを念じてゐた。そこで會長が始めて小西に面會し、二日計り逗留の間に二三回鎭魂をしてやつた所、漸く全快し六里計りの道を徒歩で宇津へ歸り、一生懸命に神さまを念じてゐた。澤山の信者が諸方から集まつて來て毎日日日二三十圓計りのお賽錢の收入があるので、小西がよい氣になり、ソロ〳〵信者の女に手をかけたり、朝から晩まで酒を呑み始めた。其

時喜樂は京都へ行つて皇典講究所へ通うてゐるので、西田に任して宇津の小西の廣間の方は構う事が出來なんだ。そうすると小西がソロ〳〵慢心をし出して、西田のいふ事を聞かなくなつて來た。一人息子の增吉といふのが二十聯隊へ入營し、日露戰爭に出征してゐた。そして朝から晩まで自分の息子の無事に歸る事計りを祈り乍ら、澤山の信者の鎭魂をやり、日に〳〵信者はふゑて來る許りであつた。そうした所が俄に電報の間遲で增吉が戰死したといふ知らせが、北桑田の郡役所から屆いたので、松元とお末といふ夫婦が西田を前後より差狹んで、ソロ〳〵不足を言ひ出した。其お末婆アさんの言はザッと左の通りである。

お末「コレ元はん餘りぢやないか、內の增吉は信心さへして居れば滅多に戰死する氣遣ひはない、金鵄勳章を持つて歸らしてやるというたぢやないか、ソレに此電報は何のこつちや、奴狸奴が人をダマしやがつてサア早う出てゆけ、內の爺も爺ぢや、華を第一といふ法華經の信者が、綾部の狸にだまされて、仕樣のない神をまつるもんだから、こんな目に會うたのだ。早う神さまを叩きつぶして川へ流しなされ、コラ元公早ういなんか」

と雪が二尺ほど積つてゐるのに無慘にも外へつき出した。西田は日の暮前に二尺程も積つてゐる雪の中へ放り出され、漸くにして半里許り山路を登り、人尾峠の頂きまで登りつめると、風の吹きよせで雪が五六尺もつもり、身動きも出來んやうになり、其夜を泣きもつて明かした事もあつた。然るに小西增吉は幾回となく危險な場合を神さんに助けられ、同じ村から六人召集されて出征してゐた者が、五人まで負傷したり戰死したりしてゐるにも拘はらず、增吉丈は怪我一つせず、二十聯隊の全滅した時に僅

か二人殘つた其一人であつた。そして金鵄勳章を貰うて聯隊長の從卒となり樂に勤めて歸つて來たのである。それから小西がビックリして西田に葉書をよこしあやまつて來て、

「どうぞ一べん遊びに來てくれ」

というので西田も再び小西の宅へ行き、一所に神の道を開いてゐたが、又もや衝突してそこを飛出して了うた。其時は會長はすでに別格官幣社建勳神社の主典をつとめてゐた。そこへ小西から手紙が來て、

「矢代といふ所に大變キッイ曲津が居るから、私の手にあはんよつて、先生に助太刀に來て貰いたい」

といふので、公務を繰合はして宇津へはる〳〵行つて見ると、

「周山村の矢代といふ所に吉田龍次郎といふ人がありますが、其奥さんが此間から二度許り參つて來られますが、主人が如何しても博奕をやめんから、やめるよに祈禱がして貰いたいといふのですが、神さんに伺うてみると大變な曲津があこには巣くうてゐるから、お前の力ではどうせだめだから、會長さんに御願ひをせいと云はれましたから、一寸御手紙を上げました」

と云うてゐる。それから小西の信者に案内をして貰うて矢代へ行つた。丁度明治四十年の夏の始めで田植の最中であつた。それから吉田の宅へ行つて見ると、自分が行くのを知つて、曲津は早くも逃げ出し、何にも居らぬやうになつて居た。其家の主人の龍次郎氏はどつかへ行つて居つて不在であつたが、妻君のお鶴さんに面會し小西の言うたやうな事を聞かされ、そして曲津が居りますか……と尋ねるので、何も居りませ

んと答へると、たよりない先生ぢやなアと言ふやうな顔をして、お禮だというて金二圓包んでくれた。それから吉田家と懇意になり龍次郎氏は建勳神社へ二三回も尋ねて來て、いろ〳〵と神勅を伺うたりし乍ら、妻君の熱心で何時とはなしに大本へ歸依するやうになつたのである。

（大正一一、一〇、一八、舊八、二八、松村眞澄錄）

瑞月

午砲の音庫の戸音もドン〳〵と
　胸をおどらす今の世の中
彗星の我地に近づき來る頃
　暗深からん遠く慮れよ

第二三章　狐狸々々（一〇六〇）

明治卅八年の八月、西田元敎は種々と艱難辛苦して山城の宇治で數十人の信徒をこしらへ、茨木清次郎と云ふ人の座敷を借つて盛んに布敎をやつて居たが、あまりの多忙に一度應援に來て呉れと云ふ端書を寄越したので、自分はソッと綾部を未明に飛び出し、鞄をさげて須知山峠を登つた頃、太陽が昇られた。それから一生懸命に榎木峠觀音峠を越へ、園部の支部へ一寸立寄り才幸太郎と云ふ信者を荷持ちとし、徒歩にて龜岡、王子を越へ沓掛から道を右にとつて伏見に着いた時は、已に太陽は西の山の上一二間ばかりの處にあつた。伏見の安田庄太郎と云ふ信者の家に立寄つて見た處、瓦屋で今竈へ火を入れて居る最中、ユックリ話も出來ずして居ると、中村の股肱となつ

てゐる男の事とて

安田『海潮はん、何で綾部に居りなさらんし。又しても病氣が起りましたか。海潮のする事は何もかも後戻りばかりじやと教祖さんは仰有るのに又行くのですか。さあ歸りなされ、それとも今竈へ火を入れて居る最中ですから話しも出來ません、今夜泊つて下さい。又後で話をしますから……』

と云ふ。

『これはまだ目が醒めんのか、愚圖々々しては大變……』

と幸太郎を促して早々に立別れ、伏見の豐後橋を渡つて宇治川の長い土手を溯り、綾部から二十四五里の道を漸く夜の八時頃茨木の宅へついた。行つて見れば人が一杯詰つて居る。南郷國松、茨木清次郎、岡田熊次郎、長谷川仙吉、其外七八人の世話方が出來て大變な勢で月例祭をやつてる處だつた。家の内にも外にも參詣者が一杯詰つてゐる。海潮が見たと云ふので澤山の信者が涙を流して喜んでゐた。それから自分は綾部の者には少しも知らさず、清次郎の家で布教宣傳をやつて居ると、毎日五六十人から百人位の參詣者が出て來て、いろ〳〵の病人がお神德を頂いて歸るので宇治の町は坊主と醫者を除く外、全部信者になつて了つた。そして近村からも三四里の處から日々參拜する非常な盛況である。宇津の小西松元の廣間が氣にかゝつて居るので、一生小西の處へ行かぬと云ふた西田元敎を無理に勸めて、視察の爲めに才幸太郎と共に使にやつた。さうすると松元は自分の宅が狹いので產土の八幡神社の廣い社務所を借つて、そこで神樣を祭り大變な勢で布敎宣傳をやつて居つた。さうして西田が來たのを見て小西は

小西「よう珍らしい、能う忘れずに來られましたな」

と横柄に云ふて居る。さうした處が小西の神懸の樣子が大變に怪しいので一寸影から審神者をして見ると、何でも狸が憑依してる樣なので押戸を開けて見ると、手のとれた古い佛さんが五つ六つ無雜作に突つ込んである。そこで西田が

西田「小西さん、こんな虫の喰た佛像は川へ流したら如何だ。此奴あ屹度狸が守護してゐるから、其奴がお前に憑つて居るのでお前の神懸が可笑しうなつて、一寸もあはん樣になつたのだ」

と云ふと、小西が大變に怒つて

小西「馬鹿の事云ふな。お前は海潮の狐の尾先に使はれて來たのだらう」

と惡口をつき、大勢の信者の前で散々に罵倒するので西田は立腹し、そこを立出で宮村へまはり、芹生峠を越ねて貴船神社を右に見乍ら、京都を横斷して漸く宇治へ歸つて來てブツ〳〵小言を云つて居た。さつすると翌日になると、西田が眞青な顏になりブル〳〵慄ひ出した。よく〳〵調べて見ると瘧を起して居るのである。そこで海潮が審神すると、西田が口を切つて

「俺は宇津の八幡樣の社務所に居る佛像を守護して居る狸だ。俺の大切な御本尊を川へ流せと吐しやがつたから、此奴の生命を取らにやおかぬ」

と意地張つて益々身体を苦めるので、摺鉢を西田の頭に着せ、其上に艾を一掴み乘せて灸を据ねると「暑い、苦い」と云ひ出し到頭落ちて了つた。それから其翌日は何ともなかつたが、三日目の同じ時刻になると西田が

西田「又來やがつた。何糞ッ」

と氣張つてゐる。されど狸の憑靈は猛烈な勢で襲ひ來り、又瘧を慄はせて苦めて居る。自分は今度は西田の頭に濡れた手拭を着せ其上に摺鉢を乘せて、百匁ばかりの艾をつけて扇で煽ぎ乍ら鎭魂をして居ると、ヤッとの事で落ちた。それから二三遍チョコ〳〵やつて來たが到頭退散して了ひ、西田は元の通り元氣になつて布敎に從事して居た。

話は後へ戻るが、西田の手紙を見て綾部を立つて園部の支部へ立寄り、それから小山の田井儀兵の宅に一寸一服してゐると、東から園部へ這入つて來た瀧車の瀧笛の聲が、何とはなしに驚きと悲しみとを含んでをるので、海潮は田井儀兵に向つて

海潮『あの瀧笛の聲は誰か轢死したに違ひない』

といふと

田井『如何にも何時もとは違ふ、烈しい聲ですな』

と外を覗くと野良に居た澤山の人が一生懸命に鐵道へ駈けつける。自分も宇治へ行く道だから、此處にユックリして居れぬと鐵道の側へ行つて見ると、小さい靑い顏した男が胴から二つになつて五六間ばかり引きづられて眞靑な顏して死んで居る。西田が自分を迎へに來て轢かれて死んだのではないかと思ふ位、其顏がよく似て居たので側へ寄り、よく〳〵見れば、さうではなかつた。其間に巡査が來たりいろ〳〵して調べて居た。轢かれた處の砂の上に新庄村の何某と木の先で土に書いてあつた。後にて聞けば此男は僅た一圓五十錢の主人の金を使ひ過し、それを園部の親類へ借りに來て拒絕せられ轢死をしたと云ふ事を新聞で知つた。さて才幸太郎の顏が俄に其轢死した男に見ね出し氣分が惡くて仕方がないのを無理に宇治迄荷を持たして居たのである。才幸

太郎は時々癇を又慄ひ出し、審神して見ると

才「俺は小山の軌道の上で轢死した男だ。一番先にお前が俺の顔を見たので憑いたのだ」

と云ふ。それから又摺鉢の炙で、やつとの事で全快させ園部へ歸した。さうこうして居ると、伏見の安田から聞いたと見て三牧次三郎と云ふ中村の乾兒が宇治へやつて來て、南郷國松や長谷川仙吉其の外の役員に種々雜多の海潮や西田の惡い事を云ひ三牧「艮の金神樣に敵とうて來た奴だから相手になるな」

と云ひ出し、到頭卅九年の一月元日の朝大勢寄つて自分を放り出して了つた。自分は一文も旅費なしに小山の田井氏の宅迄歸つて來ると澤山の信者がよつて來て泣いて喜び四五圓ばかりの小遣ひを呉れた。それを以て久し振りに綾部へ歸つて來た。それから西田は其月の十五日に三牧次三郎や南郷其の他の者の計略にかゝつて荷物一切を取られた上、放り出されてお雪と夫婦連れ伏見へ行き、お雪は或撚絲の工場へ女工になつて這入り、西田は按摩を稽古して、商賣片手に伏見地方に布教をして居たが、四十二年に自分が綾部へ歸つて大廣前を建てたりお宮を建てる樣になつてから、ソロ〳〵綾部へ歸つて來て、頻りに宣傳する事となつたのである。

これより先、西田と三牧は宇治の橋熊といふ顔役に賴まれて其乾兒等の家の祖靈祭を夜になると頻りにやつてゐた。さうした處が其祖靈箱が時々躍り出し、お供物をすると魚のお供の方へカタツと音をさしては向き直つたり、階段を下りたりするので靈と云ふものは偉いものだ。本當に西田さんや三牧さんは偉いと云ふ評判になり、何處もかも競ふて祖靈祭を賴んでゐた。橋熊は親分の事として自分の宅だけは海潮にして

貰ひ度いと云つて特別に頼みに來たので、自分が行つて祖靈祭をすませ、一服をして居ると橋熊が妙な顔をして

橋熊「もし先生、宅の祖靈さんはまだ納まらぬのですか、他家の祖靈さんは皆動くのに何故宅だけは動きません。貴方は先生であり乍ら靈が利かんのですか」

と不足相に云ふので、狸が這入つて動くのだと明かす譯にも行かず、

喜樂「私は祖靈祭は今日が初めてだから勝手を知りません、三牧さんが上手ですからして貰ひなさい」

と体よく云ふた。さうすると今度は、三牧を頼んで祖靈祭を改めてやつた所が、大變に箱が動き出したので、三牧の信用が高まり、西田がやつても自分がやつてもチッとも動かぬので到頭迷信家の信用を失ひ、自分は眞先に放り出され、西田も次で追ひ拂はれて了ふたのである。綴喜郡の郷の口の淺田安治といふ酒造屋の妹に、お鶴と云ふ癲癇病者があつた。其女の病氣を癒して呉れと云つて頼みに來たので、遙々と郷の口へ行つて鎭魂した處、一月ばかり癲癇は止まつて居た。さうした處酒倉の中で又もや癲癇が起つたのでソロ〳〵海潮の信用が薄くなつた處へ、其村で廿才位の娘で永らく足の起たぬ病人があつた。自分は再び宇治へ歸つて南郷の宅に居て布教してゐると、又頼みに來たので今度は三牧と小竹が鎭魂に行つた。さうすると其娘が

「俺は三年前に死んだ此處の婆アじやが村中の誰彼に内所で金を何程〳〵貸した」

と誠しやかに喋り立てるので、合して見ると千圓ばかりの金だから、病人の兄が

「家の婆アさんの靈がお前の處へ金を貸したと云ふが返して呉れ」

と其處ら中へ歩いたので、村中の大騒動となり

「一体誰がそんな事云ふたか」

と調べて見ると、三牧が鎮魂して其娘が喋り出し、小竹と云ふ男と二人がついて居ると云ふので、巡査がやつて來たり色々と問錯が初まつた。そこで郷の口から自分を呼びに來たので行つて見ると、其娘は頻りに婆アさん聲色を使ふて、『如何しても金を貸した』と意地張つてゐる。それから三牧と小竹を宇治へ歸し、自分が一晩泊つて樣子を考へた處が、非常に怪しいので刀を一本主人から貸して貰ふて祝詞をあげ乍ら空を切つて見ると簞笥の横から畫の眞中に七匹の豆狸が飛び出した。それと共に其の娘は病氣が癒つて了つた。さうすると海潮にお禮を云ふ所か、

「お前さんは三牧の樣な弟子を使ふて宅の娘に狸を憑けて、こんな村中の騒動をさしたのだらう」

と反對に理窟を云ひ

「ぢ狸奴が、早うかへれ」

と嗷鳴りつけられるので到頭狸憑けにしられて了ひ怨みを呑んで宇治迄歸つて來た。

さうすると、南郷や長谷川が三牧と一つになつて、三十九年の正月元日に朝つばらから自分を放り出す事となつたのである。靈界の事の分らぬ連中になると困つたもので譯を云へば云ふ程益々疑ふて始末におへぬものである。それから自分も病人の鎮魂がサツパリ嫌になり、神懸の修行も斷念して了ふた。が大正五年に横須賀の淺野さんの宅へ行つた時、參考のために又もや幽齋の修行をして見せたのが元となつて淺野さんが靈學を熱心に研究し始める事となつたのである。

（大正一一、一〇、一八、舊八、二八、北村隆光錄）

第二四章　呪の釘（一〇六一）

明治卅三年八月下旬の事であつた。會長は大本に在つていろ〳〵と一心に教典を執筆してゐる時、郷里の穴太から……元治郎危篤すぐ歸れ……といふ電報がついたので直に教祖に其の由を申上げた。教祖は早速に神さまにお伺ひになり、

教祖「余程の大病ぢやそうですから、早う行つて助けて上げなされ、元はんもこれで改心が出來て、反對をせんよにならはりませう」

との言に早速草鞋脚絆に身を固め、木下慶太郎氏をつれて、翌早朝から龍宮館を立出で、十四里に餘る山路を辿りつゝ其日の黄昏時に漸く穴太の自宅に着いた。其夜は二人共旅の疲れで前後も知らずに寢て了つた。

翌朝早く起て病人は如何かと調べてみるに、手もつけられぬやうな熱と痛の爲に、一寸も身動きならずウン〳〵と唸り聲を立て苦んでゐる。直に神前に向かつて元治郎の病氣平癒を祈願した。そうすると喜樂の腹の中から、固まりがゴロ〳〵と上つて來て、

喜樂「此病は商賣敵で十五人の鍛治屋の團體から呪はれてゐるのだから、これからすぐに產土さんへ參拜して見よ。お宮の裏の二本の杉の木に、元治郎の姿を畫き、其上に七本の釘がうつてあるから、早う行つて其釘を拔き取り、其釘跡につき立の餅をうめておいたら、此病氣はキッと直る」

との事であつた。かくと聞いた傍の人には半信半疑の體で、會長の顏をポカンとして見つめて居た。弟の幸吉と木下慶太郎氏と下男の幸之助と三人が、神のお告のま

ゝに、直樣產土の小幡神社に至り搜してみれば、果して二本の大杉に五寸位の釘が八本づゝ打込んである事を發見し、直に釘を拔き取つて急いで歸つて來た。そこへ村の衛生係が巡査と醫者をつれて入來り、

「此病氣は猩紅熱だから、傳染する虞がある、今すぐに豫防の手當をしなくてはならぬ、又お前たちは家を一歩も出てはならん」

ときびしく言ひ出した。其當時は村中に猩紅熱が流行して、どこの家にも二人三人の患者が唸つてゐたのだから、醫者も猩紅熱と診察したのであつた。會長も二三年計り醫學を研究した事があつたのを幸ひ、病理上から傳染病でない事を說明し、これはきつと生靈の祟りだといふ事を主張した。醫者等は嘲笑うて

「此開けた世の中に、生靈の祟りなどゝいふ事があるものか」

と一笑に附して聞入れぬ。會長は熱心に靈的の作用を說き、且拔いて來た其釘を見せて證據とした。醫者を始め巡査衛生係は半信半疑の體で一先づ引取つて了つた。不思議にも今まで苦悶してゐた元治郎は、社內の杉から釘を一本〳〵ぬき取ると同時刻に體の中が涼しく覺ゑ、やがて全部の釘をぬき取ると同時に、やがて熱も痛も拭ふが如く去り、今まで身動きだに出來なんだ者が、俄に起上がつて喜び勇み、もうこれなら大丈夫だと泣き笑ひをした。こゝに始めて見舞に來てゐた人も神德の廣大無邊なるに驚いた。元治郎は喜樂の不在宅で鍛冶屋を職業としてゐたが、下男の幸之助は澤山の鍛治職人から賴まれて、氏神の杉の木に元治郎の姿をかき、釘を打込んで呪ひ殺さうとしたのであつた。それを神さまの靈眼に依つて發見し、病氣が直つたのだから、俄に會長が恐しうなり、自分の罪が發覺せん事を恐れて、其夜の中に自分の女房と共

に何處ともなく逐電して了つた。あとにて聞けば幸之助は紀州の故郷へ歸ると共に元治郎と同じ重病にかゝり、大變に苦んだと云ふ事であつた。二三日穴太に逗留してゐると、近所の熱心な人が參つて來て、いろ〳〵と病氣の御祈願を頼むので鎭魂をし、難病を癒してゐた。やがて綾部へ歸らうとする時、元治郎に

喜樂『お前は神さまの思召に依つて、こんな目に會うたのだから、キッと幸之助を恨めてはならんぞ、一日も早く眞心に立歸つて、神さまの御惠を享けるよに祈つてやれ、幸之助が決して惡いのではない、余りお前の我が強いから、大勢の同職人に憎まれたのだ、お前もこれから病氣が直つたら、心を入れかへて信神をせい』

といつて木下と共に綾部へ歸る事となつた。そして歸りがけに重ねて、

喜樂『お前の病氣は呪ひ釘をぬいたのだから、一日は全快したやうであるけれど、お前の罪は消えてをらんから、再び惱みが出て來るだろ、併し命には別狀ないから安心せい、二月計りは苦しいが、それを越したら元の體になるだろう』

というておいた。其後又もや體がそこら中がウヅき出し、腰のあたりが腫れて、再び身動きもならぬ樣になり、困つてゐたが六十日目の夜、二三升の膿汁が腰の腫物からはぢけ出し、始めて病氣が全快した。今まで信神の嫌であつた元治郎もこれより御神德の有難い事を悟り、今までのバクチを止めて朝晩神さまを拜む心になり、とう〳〵神の道を宣傳するやうになつたのである。

それから八十八歳になつた喜樂の祖母が亡くなり、百日祭をすました翌日家が燒けて了つたので、母と共に家族一同が、一先ず綾部へ引つ越して來ることになつたのである。自宅の燒ける事は二三年前から、神さまに知らされてゐた。それ故に何時も元

吉に氣を付けて村々の百姓から、修繕の爲に預つて來た農具を、別の小屋の中へしまつておけと云つておいたお蔭で、上田家の物は何ちかも殘らず燒けて了つたが、預つた農具は少しも燒けなかつたのは不幸中の幸であつた。

家の燒ける前の日、西田は弟の幸吉と綾部へ一度參つて來うと、相談をきめ、家に寢てゐると、喜樂が黑木綿の紋付羽織を着て歸り來り、火の用心が惡いから、二三日どこへも出るなと云つたと思へば夢であつた。又母の耳へ、どこからともなく、火事があるから氣をつけ、どこへも行くなと云ふ聲が聞えたので、不思議がつて注意をしてゐた所、俄に佛壇の上の方から火が出て、丸燒けになつて了うたのである。其の時王子の栗山のおことはんが綾部へ參つて來たので、歸りがけに手紙を書いて、龜岡の古世の岩崎といふ伯母の內へ言づて、穴太が燒け相なから氣をつけて貰いたいというてやつた。伯母は一日二日グヅ〳〵してゐる內に穴太が燒け、穴太から行つてみると、喜樂の手紙が來てゐるので、驚いたといふ事があつた。

母及弟妹は二三年綾部に來て居たが、餘り元の役員の反對がきつく、小松林の親ちやというて虐待をされ、しまひには役員に蹴り倒されて息が止まり、折よく西田が歸つて來て介抱して、息を吹き返したといふやうな鹽梅で、母は大變に怒つて、一生綾部の方向いて小便もこかんと云つて、明治卅五年の秋一先づ園部まで引上げ、それから卅六年には、元の穴太へ歸つて了うたのである。

併し其時の役員は或迷信上から行つたことで、決して惡い事とは夢にも思うてゐなかつたのである。御道の爲世界の爲になることだと固く信じて、喜樂の母の橫腹まで蹴つて氣絕さすやうな目に會はし得々として居たのであつた。實に迷信程恐しいもの

はないのである。

（大正一一、一〇、一八、舊八、二八、松村眞澄錄）

瑞　月

星一つ光も強くてら山の
尾の上に浮ぶ冬の夕暮

清澄な夕べの空に星一つ
蒼空占むる影の偉大さ

第二五章　雜草（一〇六二）

建勳神社に奉仕中、喜樂は休日を利用して宇津の小西の布教してゐる八幡宮の社務所へ出張して見た。さうすると澤山な信者が集つて、祈禱をして貰うてゐる。湯淺仁齋氏の、妻君も滿鑑飾をこらして參拜して居た。さうすると小西が大勢の前で

小西『あゝ會長さん、來なさつたか、狐はモウ去にましたかなア』

とおチョくる樣に無禮な事を言ふ。喜樂はムッとしたが、いや〳〵待て〳〵と胸をなでおろし、喜樂は永らく綾部で大勢に壓迫や妨害を加へられ、隱れ忍んでやう〳〵西田と二人してこゝにお廣間を拵へ、こゝを根據として大本の敎を開かねばならんのだから、今怒つては大事の前の小事だと、ワザと平氣な顏をして笑うて居ると、小西は

尙もつけ上り

小西「皆さん此人は綾部の海潮と云ふ人で、瑞の御靈の大神樣が御守護して御座つたのちやが、官幣社の神主になつたりするもんだから、神樣が愛想を盡かして、此松元に移り替へなさつたのだから、瑞の御靈の御神德は皆此松元におさまり、海潮さんは蟬のぬけがらになつた後へ、稻荷山のケツネがついて居ますから、モウ駄目ですこんな人に鎭魂をうけてはいけませぬ」

喜樂「あゝさうだ、私は脫殼だ、どうぞ松元さんに、一時も早く綾部へ來て御用をして貰はねばなりませぬ」

といつたら、松元は得意になつて

小西「綾部の敎祖樣が變性男子の御身魂で、此松元が松の大本で、變性女子の御用をするんだが、モチと海潮の改心が出來ぬと、中々行けませぬワイ」

と云ひ乍ら、折角開いて置いた北桑田の信者を小口から、第二の中村のやうに惡口を言うてふれまはして了うた。其時湯淺夫婦も松元の敎會へ病氣の爲に參拜して居たが湯淺はどうしても松元の行方が氣にくはんので、自分は船岡の妙靈敎會へ月參りをし妻君のみが隱れて信仰をして居つた。それから明治四十一年の二月の事であつた。會長は建勳神社を辭職して、御嶽敎の假本廳が伏見の稻荷山に宏大な館を立てゝ設置されてあつたので、神宮官廳から賴まれて、副管長格の主事といふ役をつとめて居た。喜樂が御嶽敎へは入つたのは、御祭神が國常立尊であるのと、將來神の道を布敎するに付いて見學の爲に、無報酬でつとめて居たのである。そこへ湯淺齋次郎氏が小西

に頼まれたと云つて使に來た。其時海潮は大阪の生玉に設置されてある、御嶽教大教會へ教會長なので二三日出張して居た。其不在中に湯淺は御嶽教の本廳で泊めて貰ひ喜樂の書いた澤山の書物を半分計り讀んで了ひ、非常に信仰を固めて居た。そこへ喜樂が歸つて來て湯淺に會ひ來意を尋ねると

湯淺『小西松元さんの息子の嫁に妹のお君さんを貰いたい』

との事であつた。海潮は小西松元の爲には非常に侮辱されて、餘り面白くなかつたけれど、お道が大事だと思うて陰忍して居た所である。一層の事妹をやつたならば小西も反對をせず、自分の云ふことを聞くやうになるだらうと思ひ、早速穴太へ歸つて母と相談の上、僅に十五才の妹を無理にたらかして、湯淺氏の媒介で、一先づ湯淺の宅へ落着き、結婚式を擧げさしたのであつた。それから小西は改心するかと思ひの外、益々增長してどうにも斯うにもならぬやうになり、遂には各信者の小西に對する不信任が加はつて來て、一人も來んやうになつて了つた。さうすると小西が獨斷で綾部の大本へ、明治四十三年にやつて來て、お廣間に先生顏をして坐り込み、藥の指圖をしたり、鎭魂を始め出した。教祖さんは鎭魂や藥の指圖が大の嫌ひなり、二人の中に立つて大變に氣をもんだ。さうかうして居る內に御嶽教の機關雜誌「經世軍」といふ小さい發刊物の記者をして居た千葉埴麿が御嶽教を放り出され、食ふことが出來ぬから、麥飯でもよいから綾部に置いてくれぬか……と手紙をよこしたので、承諾の旨を答へてやると、すぐに夫婦二人で綾部へやつて來て、それから宮澤圓龍といふ法華坊主上りの神道家を呼びよせ、朽木縣の吉田村に二億万圓の金がいけてあるから、堀り出して國家の爲に盡さうかといひ出し、千圓許りも工面して大本から金を引出し、

そして其實は半分以上自分の借金なしをしたりして了ひ、大本から小西の息子の増吉と田中善吉とが吉田へ金堀に行つた事があつた。モッと金をよこせ、キッと出ると云つて來たけれど、モウそれぎりで金を送らず田中と増吉とを綾部へ呼び返した。サアさうすると千葉が教祖さんに甘く取入り、ソロ〳〵會長の排斥運動に着手し、教祖の命をうけてはそこら中を訪問して、自分勝手なことをやつて居つた。

小西は綾部に居れなくなつて、再び宇津へ歸り、神樣を拜んで居たが、二三十人の信者が代る〴〵參拜して居た。増吉は千葉と宮澤にスッカリ抱込まれ、大本へ反旗を飜して兩人が我家へ連れ歸り、園部の片山源之助や淺井はな等と牒し合はして大本乘取りの策を講じてゐた。そこで湯淺がワザとに小西の味方となつて陰謀を殘らず探り大本へ報告したので、彼等も策の施すべき所なく、とう〳〵東京へ宮澤は逃げ歸り、千葉は片山源之助と園部の新町で報公義會といふ會を拵へて、片山を大將とし、淺井はなをしまひには放り出して、勝手な熱を吹き、盛に大本に反對をつゞけてゐた。小西はとう〳〵御嶽教の教導職となつて、京都の大本の信者の宅へ入り込み、盛に病氣直しをやつて、流行らしてゐたが、其家の妻君と妙な關係が出來、主人に見つけられ女房は直に裏の井戸へ投身して死んで了つた。それから大變な問着が起り、法律問題が持上らうとした。そうすると小西増吉が自分の姉と一緒にやつて來て、反對に喜樂に熱を吹き、此事件を甘く事ずみさせる爲のあやまり金を喜樂の貧弱な懐から無理に出さして歸つた事がある。

それから小西は京都にも居れなくなり、再び宇津へ歸り中風の氣になつて弱つてゐたが、大正六年頃とう〳〵歸幽して了つた。小西の弟子に小澤惣祐といふ男があつて

これが又江州の貝津へ支部を開きに行き、そこの娘と妙な關係が出來て放り出され、綾部へもやつて來て役員と始終喧嘩許りしてゐたが、遂には綾部を飛出し茨木や肝川なぞにお廣間を建て、暫くすると其土地の役員と衝突して飛び出し、遂には龜岡の旅籠町で京都の大内といふ後家をチョロまかし、又失敗して大正六年頃綾部へ歸つて來て、元の祖靈社で腹を十文字にかき切り、喉をきつて自殺して了つた。それから杉井新之助といふ男が出て來て、大本を交ぜ返し、自分が全權を握らうとして、二代澄子に看破され、叱りつけられて、貝原の大本の支部へまはされ、そこで大本の反對運動を起し、大社教の教會を建て、今に宣傳してゐるそうである。

（大正一一、一〇、一八、齊八、二八、松村眞澄錄）

第二六章　日の出（一〇六三）

明治三十二年の夏上谷の修行場にて幽齋修行の最中審神者の喜樂に小松林命神懸せられ

「如何なる迫害や壓迫があつても綾部を去つてはならぬ。兎も角明治卅五年の正月十五日までは綾部で辛棒をせよ」

とのお諭しであつた。それで喜樂はあらゆる迫害と侮辱を隱忍して卅五年を待ちつゝ神妙に神樣の道を修行して居た。愈卅五年正月十五日が來たので

喜樂「今後何何しませうか」

と伺つて見た所

「明日の朝からソッと園部の方面を指して行け」

との神示が降つたので輕裝を整へ、只一人澄子に其意を告げ布敎傳道の途に上つた。澄子は初めての姙娠で已に臨月であつた。何時出産するかも知れない場合である。自分も大變に初めての子の出産であるから氣にかゝつて仕方がない。けれども一旦神樣に任した身の上、妻の爲に神務を半時でも忽にする事は出來ぬと決心し、夫婦相談の上出立したのである。

先づ園部本町の奥村と云ふ雜貨店へ落ちつき、主人夫婦の懇篤なる世話によつて其家の別宅を無料で貸して貰ひ、且つ衣食万端を奥村から支給されて日夜宣傳に從事しつゝあつた。奥村氏は園部に於て相當の地位名望もあり財産もあつた。さうして清廉潔白の聞ゑの高い紳士である。其奥村氏が先頭に立つて商業の傍、熱心に宣傳したので、地方の紳士連中は先を爭うて入信した。園部へ落ちついてから十五日目の夜に綾部に殘してある澄子が出産した樣な夢を見たので、神樣に聞いて見ると出産をしたから一先づ歸つてやれと云ふ事であつた。そこで奥村氏に其旨を告げ留守中を賴みおき、淺井はなと云ふ婆さんに神前の御給仕を命じて只一人スタ〳〵と檜山の坂原巳之助と云ふ熱心な信者の宅へ立寄り晝飯を供せられ、一服して居ると、其處へ慌たゞしく綾部から四方祐助と云ふ爺さんが訪ねて來り門口から

祐助「海潮さんはお内に居られますか」

と尋ねてゐる。坂原巳之助は綾部の中村一派のやり方に愛憎をつかし、喜樂の敎のみを信從してゐたのだから、屹度喜樂は此處に居るだらうと思つて尋ねて來たのである奥の間で祝詞を奏上して居た喜樂は此聲を聞いて靜かに表へ出て

喜樂「あゝ祐助さん、能う來て呉れた、まあ一服しなさい」

と云ふと爺さんは庭に立ちはだがつた儘、

祐助「これ海潮、何をグズ〳〵して居るのだ。綾部は大變な事が出來て居りますぜ」

とゴッ〳〵した聲で睨めつける樣に云ふ。喜樂も何か澄子の身の上に就て變事でも出來たのではないかと、少しく不安の念に驅られて

祐助「祐助さん、澄子は機嫌よく出產しましたかな」

と尋ねると、祐助は首をブリ〳〵と振つて

祐助「ハヽー、出產も糞もあるものか。自分の女房が臨月になつてゐるのに敎祖樣に隱れて其處ら中をうろつき廻り、悠々閑々と何の事ぢやい。綾部には大變の事が出來ましたぞ。それだから敎祖樣が何處へも行くでないと仰有るのだ。敎祖樣の命令を背くと何時でもこの通なりますのじや」

と息を喘ませて諒解し難い事を怒鳴り立てる。喜樂は益す不安の雲に包まれて

喜樂「澄子は安產しただらうなア。そして男か女か何方が出來た、早く知らして呉れ」

と云はせも果てず、祐助は又もや首を頻りに振つて

祐助「ハヽ、凡夫の俺がそんな事分つて堪るものか。海潮さんは天眼通が利くぢやないか小松林に尋ねたら、それ位の事は分りさうなものぢやないか。それが分らない樣な事で偉さうに神懸ぢやの、先生ぢやのとは云ふて貰ひますまい。綾部は何ぼころの騷ぎぢやないわ。改心をせんと、こんな事が出來ると何時も敎祖さんが仰有つたのを尻に聞かして居るものだから、こんな不都合な事が出來たのぢや。初產の事とて敎祖さんも大變な心配、此祐助も何れ丈心配したかしれませぬぞや。お前さん

も綾部へヌケ〳〵と歸つて來る顏がありますまい。歸るのが嫌なら歸らいでも宜しい左樣なら」

と云ひ乍らスタ〳〵と阪原の家を出て行かうとする。喜樂は益す氣になつて

喜樂「これ祐助さん、吉か凶か、どちらか、それだけ聞かして呉れ」

と小さい聲で尋ねて見ると祐助は

祐助「そんな事の分らぬ樣な天眼通が何になるものかい」

とブツ〳〵囁き乍ら委細構はず駈け出し

祐助「よう思案するがよい」

と捨臺詞を殘して早くも綾部へ歸つて行く。喜樂は慌てて阪原氏に送られ一目散に祐助の後を追ひ駈けた。さうすると祐助は三の宮のある茶店で腰をかけ

祐助「あゝ云つておけば屹度歸つて來るに相違ない」

と高を括つて居る。

「兎に角安產した。そして女の子が出來た」と云つたら「あゝさうか」と云つたきり喜樂は歸らぬから心配さしたら歸つて來るだらうと、綾部で役員信者相談の結果祐助が代表者になつて選まれて來たのだと云ふ事が後になつて分つた。丁度自分が園部で夢を見た其日に直靈が生れたのである。其日は新三月三日舊正月二十八日であつた祐助と三人連れで綾部の宅に歸つて見ると、盛に赤兒の泣き聲が聞ゐて居る。初めて自分の子の聲を聞いた時は何とも云はれぬ感じがした。然しあの聲で子は達者であるが、澄子の身體は如何だらうと案じ乍ら門口を跨げて見ると母子共至極壯健であつたそれから教祖さんに

「自分の女房が臨月で何時子が出來るか分らんのに、神様の命令も聞かずに、そこら中に飛び出すのは餘り水臭いぢやないか」

と散々叱言を云はれ、謝り入つて三十日の間・宮詣りのすむ迄綾部に蟄居して居た。さうすると園部の奥村から「澤山の信者が待つて居るから早く來て呉れ」と云ふ手紙が毎日の樣に出て來るので、四月の三日再び綾部を飛び出し園部で布教をつゞけて居た其留守中に自分が明治三十一年、穴太に居つた時から三十四年一杯かゝつて執筆しておいた五百冊の書物を四方平滅、中村竹藏の發起で立替の御用ぢやと云つて悉皆燒いて了つたのである。それから園部を根據として大阪へ教線を開き、陸軍砲兵中佐の溝口清俊と云ふ休職軍人と心を協せて大阪市の宣傳に從事して居た。此中佐の宅へ心安く遊びに來る、脊のスラッとした、人品のよい少し頭の光つた男が溝口中佐に說きつけられて熱心な信者となり、追々中流以上の信者が出來て天王寺の附近に一万坪の地面を買ひ、靈學會の本部を設置する段取とまでなつてきた。さうして其溝口の宅へ出入して居た男と云ふのは、大阪の難波分所長の内藤正照氏であつた。内藤正照氏と溝口中佐と喜樂の三人は大阪市中の稻荷下げの教會を巡歷して種々と靈術比べをやり、それを唯一の樂しみとして布教は、そつちのけに三百六十軒ばかり市中の神懸を探し廻つて靈縛をしたり、色々と自分等の靈術を誇り得意になつて居た。今から思へば實に馬鹿らしい事を得意になつてしたと思ふ。然し此間に神懸に對する非常な經驗を得た事を思へば、これも矢張御神慮であつたかも知れぬ。それから北海道の銀行の頭取をやつて居た山田文辰と云ふ男や、内藤や、京都牧場の松原榮太郎等と人造精乳會社を京都、大阪、園部に設置し、數千圓の金を醵出して一つの事業を起し宣傳の費用に當

てやうと目論見、已に着手して居る所へ、京都の高松某が中村竹藏の指圖によつて會社の工場修繕の大工に雇はれ歆々に喜樂の惡口をなし、それが基となつて松原榮太郎若林某、山田文辰等が變心し出し、折角組み立てた發頭人の喜樂や內藤を放逐せんとした。中村は何とかして喜樂が京阪地方で活動するのを妨害し、失敗の結果綾部へ逃げ歸り一間へ押し込めて活動の出來ないやうにしてゝらねば此儘にして置いては虎を野に放つやうなもので、大本の敎をとつて了ふに違ひないと役員一同が相談の結果かう云ふ手段をとつたのであつた。そこで喜樂は己を得ず精乳會社を脫退し、內藤正照と愛善坂の麓で神樣を祀り、布敎宣傳に着手して居た。難波新地の婦人科の醫者で杉村牧太郎と云ふ金光敎の熱心な信者があり、又杉本惠と云ふ御嶽敎の敎導職や大阪大林區署に勤めて居た高屋利太郎、並びに鎭力職の池田大造等と圖り大宣傳をやつて居た。大阪の俠客の團熊や山田嘉平等も信者となつて大活動を始め、漸く曙光を認め、高屋利太郎は一同の代表者として一度綾部へ參拜して來やうと云つて詣つて來た所、中村が一生懸命に喜樂の惡口をついて且脫線的の言葉を並べ『洋服を着た樣な連中は此處には來る事ならぬ』と高屋氏を箒で掃き出したので、高屋氏が大阪へ歸つて來て憤慨し折角組み立てた靈學會へひびが這入り、ゴタ〳〵して居る所へ中村竹藏の內命で三牧次三郎が尋ねて來て、此男が口を極めて喜樂を罵倒したので止むを得ず大阪を立ち綾部へ歸つて來たのは明治三十六年の十一月頃であつた。さうすると役員が寄つて集つて自分の洋服を剝ぎとり、帽も靴も服も引き裂いて雪隱へ突つ込んで了ひ『さあ、これで四つ足の皮を剝いでやつた、これで海潮も改心をして、おとなしくなるだらう。神に背いて致した事は何事も九分九厘でクレンと覆るとお筆に出て居

りますが、これで海潮さんも氣がつくだらう」

と自分等が極力妨害しておき乍ら、神さんの業の樣にすまし込んで居る。それから自分も再び離れの六疊に蟄居して又ちや隱れ忍んで古典學を研究したり、筆の雫や道の大本等の執筆にとりかゝり、明治三十八年の八月まで綾部に尻を据ゑて時を待つ事としたのであつた。

（大正一一、一〇、一九、舊八、二九、北村隆光錄）

浪波津に救ひの御舟浮べつゝ　瑞月

おほれし魂を渡す瑞靈

第二七章　仇幣（一〇六四）

明治卅八年二月の事であつた。大本の四方平藏、中村竹造其外十人の幹部は本年中に世の立替立直しが完成して、五六七の世が出現すると、脫線だらけの法螺を吹き廻り、日露戰爭の最中なので、お筆先の神示が實現すると、大變なメートルをあげて逆上せあがり、中村竹造の如きは筆先の文句の中に、道の正中をまつすぐに歩けといふ語句のあるのを楯にとり、暗やみの世の中といふ文句を讀み覺えて、書の眞最中に十曜の紋のついた提灯に蠟燭をともし、大道の正中をすました顏して、牛車が出て來うが、何が來うが、少しもよけず、左の手に提灯を持ち、右の手に扇子をすぼめて握り肱を振つて歩くので、牛車の方からよけると、神さまの御威勢といふものはエライも

のだ、誠の道の正中さへ歩いて居れば、どんな者でも此通よける……とます〳〵闘に乗つて、往來の迷惑も構はず、筆先の文句を高らかに讀み上げ乍ら、大道を濶歩するといふ逆上方であつた。或時農具を車に滿載して賣りに歩き乍ら、元伊勢の方面まで宣傳に往つて居つたが、陰暦二日の月が見にたといふので、サア大變だ、三日月さんは昔から拜んだ事があるが、二日のお月さんが拜めたのは全く世の變るのが近よつた印だ、グヅ〳〵しては居れんと、金の財布も荷物も車も、由良川へ放り込み、一生懸命に綾部へ走せ歸り、大變〳〵と連呼し乍ら、二階に齋つた神壇の前へ行つて、一生懸命に祈願をこめ、フッと顔をあげると、そこに大きな水鉢に清水が汲んで供へてあつた。二階の窓があけてあつたので、雀が飛込み、水鉢の上に糞を一片たれたのが面白く水に浮いてるのを、フト眺めて、……ヤア愈〳〵立替が始まつた。水の中に優曇華の花が咲いてゐる……とさわぎまはるので、四方平藏始め幹部連中が、神前へ進んで之を眺め、ます〳〵有難がつて、涙聲になり、祝詞を幾回となく奏上し、六疊の離に居つた喜樂の前へ出て來て、中村竹造は肱を張り、さも鷹揚に、

中村「コレ會長さん、よい加減に改心をして、小松林さんに去んで貰ひ、早く坤の金神さまになつて、女房役をつとめてもらはんと、時機が切迫致しましたぞ、昨日も昨日とて、元伊勢から歸つて來る際二日月が拜めるなり、今日は又お供への水の中に優曇華の花が咲きました、グヅ〳〵しては居られますまい、早く改心なされ」

と聲高に叱り附けるやうに言ふ。そこで喜樂は

喜樂「二日月さんの拜めたのは別に珍し事はない、自分達は穴太に居つて、チョコ〳〵拜んだ事がある、お前達はこんな山に包まれた狹い所に暮らしてるから、二日月さ

んが拜めたというて騒ぐのだらうが、そんな馬鹿な事を人に言うと氣違にしられるから、どうぞそれ丈は言はんやうにしてくれ」

といはせも果てず、中村は口を尖らし、

中村「コラ小松林、昔から三日月といふ事はあるが、二日月といふ事があるかい、穴太で二日月をみたなんて、そんな出放題な事をいうて、水晶の靈を曇らさうとかゝつてもだめだ。世の立替が近よつたといふ事を、艮金神變性男子の御靈が大出口神とあらはれて、日出神と龍宮さまの御手傳で立替立直をなさる時節が來たのだ。早く小松林が改心を致して、會長の肉體を去り、園部の內藤へ鎭まりて、坤の金神さまの肉のお宮とならん事には、世界の神佛事人民が何ほど苦むかしれんぞよ、コラ小松林、それが嘘言と思ふなら、一寸二階の御神前へ來てみい、水晶のお水に優曇華の花が咲いてる、それを見たら如何な小松林でも往生せずには居られまい」

と得意になつて喋り立てるので、不思議な事をいふワイ、又ロクな事ではあらうまいと、早速二階へ上つてみると、雀の糞がパッと水にういて、白く垂れ下り、丁度優曇華の花のやうに見えて居る。喜樂は一寸木の箸の先で其れをすくうて、中村の鼻のそばへつきつけて

喜樂「オイ之は優曇華ぢやない、雀の糞だ」

といつた所、中村は妙な顏をしてだまり込んで了うた。そうすると外の役員が約らん顏をして、

「どうぞ會長さん、こんな事を人にいはんやうにして下され、笑はれますから」

と頼み込む可笑しさ。

これより先中村の女房であつた菊子といふのは、中村が毎日日日商賣もせず、脱線だらけの事をいひ歩くので、幾度となく意見をしたが、とう〳〵中村は怒つて、「お菊に小松林の惡靈がついた」……といひ出し、放り出して了つた。そして教祖の身内から女房を貰はうと考へてゐたが、福島久子を入木から引戻して自分の女房にしやうと企んでゐたのを、喜樂に妨げられて目的を達せず、それより中村と久子とは大變に喜樂のする事成す事に一々妨害を一層猛烈に加へるやうになつて來た。

四五年たつた明治卅八年の頃には愈中村に教祖から妻帶をせよと、命令されたので、役員がよつてかゝつて、いろ〳〵信者の娘を中村に紹介したが、如何しても首をふつて應ぜなかつた。中村は澄子の姉の龍子を女房に貰はうと、暗中飛躍を絶にやつてゐたからである。龍子も心の中にて中村の女房になり、改心をさして、會長の云ふ事を聞かすやうにせうかと迄考へてゐた。併し中村は龍子を自分の妻となし、喜樂や澄子を退隱さして威張つてみやうという野心があつたのである。教祖から龍子の夫は中村竹造、竹原房太郎、木下慶太郎の三人の内から選めとの命令が下つたので四方平藏其他の幹部連が、とう〳〵中村の妻にすることにきめて了つた。今でさへ喜樂や澄子はこれ丈壓迫や妨害をうけてゐるのに、中村が姉の婿となつて、噪やぎ出してはたまらんと思ひ、教祖に向つて

喜樂「どうぞ今日限り澄子と離緣して下さい、歸ります」

といつた所、教祖も大變に當惑し、四方平藏を呼んで、

教祖「どうぞ會長さんの、此事は、意見に任してくれ」

といはれたので、幹部の中でも少しく喜樂の言ふ事を耳に入れる木下慶太郎を養子に

したがよいと言つたので、龍子を別家させ木下を養子に入れる事とした。そして入木の福島久子の股肱となつて喜樂の布教先を古物屋に化け込んで、軒別に邪魔しに歩かしてゐた、中村小松といふ女を中村の女房にした。それから中村はスッカリ失望落膽の結果、發狂氣味になり、遂には自分の昔からの陰謀を、あたりかまはず自白する樣になつて來た。

餘り中村は神さまに反對するので、神罰を受けて糞壺へはまつて死んで了ふといふ事を明治卅七年の四月三日の夜、神さまから夢に見せられ、道の柴に書きとめておいたが、とう〳〵明治卅九年に其夢の如くになつて狂ひ死にをして了つたのである。

中村と入木の久子とは始終往復し、內外相應じて、會長の排斥運動を續行してゐた。久子は最近に至るまで、ヤハリ喜樂を敵視して廿四年間不斷の反對運動を繼續してゐたのである。

かういふ具合で、如何しても迷信家連が會長の說く所を一つも用ひず、そんな書物や學にあるやうな敎は惡の敎だからと云つて、一人も聞いてくれんので、澄子と相談の結果、再宣傳に飛出し、村上房之助が漸く目が醒めかけたので、村上を從へ、入木まで行つて見ると、角文字は一切使ふ事はならぬ、外國の行方ちやと、盛んに攻擊、喜樂の書いた神號迄も燒きすてさしたくせに、入木の神前には角文字で、艮金神國常立尊と太く記した提灯が一對ブラ下り、其外の神具にも殘らず、角文字が記してあつた。そこで喜樂は

喜樂「福島さん、此字は外國の文字で、神さまにお氣障りにはなりませんか」

と尋ねてみると、福島はビリ〳〵と眉毛を上げ下げし、

福島「此角文字はお前に憑つた小松林が書いたのとは違うから差支はない、信者が眞心であげたのだから、喧しくいふな、假令外國の字でも日本人の手で書いたのだ」

と勝手な理窟をまくし立てる。そこで喜樂は村上と二人、入木を立出で、北桑田方面へ布教に行つた。それから二三ケ月經つて入木へ立よつて見ると、福島は痩衰へ、骨と皮とになり、夫婦が涙ぐんで控へて居る。樣子を聞いてみると、艮金神さまの命令で、三十日の間一日に一食の修行をなし、あと三十日は生の芋をかぢり、あと三十日は水許りを飲み、あと十日は水一滴も飲ますに修行をした。今日が丁度百日の上りで、福島寅之助は、これから天へ昇つて、案れた世の中を水晶に致すお役になつたから、今女房と別れの水盃をした所だ、何だか體がフイ〳〵として、獨りで空へあがりそうになつて來たといつてゐる。喜樂はそれとはなしに丸山教會の或教師が名古屋で屋上三丈三尺の高臺を作り、これから天上するというて、二百人許りの信者は三丈三尺の高臺の下から、天明海天々々〳〵々々と祈つてゐた。教師はいつ迄たつても黒雲が迎ひに來んので、氣をいらつて宙に向つて飛上つた途端に、高臺から轉落し、大腿骨をうつて負傷をしたといふ事が其頃の新聞に出てゐたので、それを話して聞かし注意をすると、妙な顏して次の間へ入つて了ひ、力のない聲で、

福島「今日の十二時に天上をさすといつて、であつたけれど、小松林の惡神が來たによつて、一時間仕組をのばしたぞよ、早く家内の久どの小松林を去なせよ」

と呶鳴つてゐる。喜樂は福島久子に餘り氣の毒でたまらんので、曲津がだましてるのだといふ事も出來ず、大方靈が天へ上るのだらうから、肉體に氣をつけて、松の木へでも登りそうだつたら止めなされ……と忠告をして歸つたものゝ心配でたまらんので

入木の或茶店に休んで、福島の樣子を遠くから考へて居た。もし松の木へでも上りそうになつたら止めに行かうと思うたからである。

そしたら福島の守護神は……都合に依つて仕組を延ばした、明日の朝まで延ばした、明後日まで延ばした、と一週間程延ばした。出鱈目な託宣をしたので、福島も氣がつき、久子を入木の町へ買物にやつた不在の間に、四五年もかゝつて晝夜せつせと書いた自分のお筆先を一所によせ、石油をかけて一冊も殘らず燒いて了ひ、

福島「コラおれを騙しやがつた惡神奴が」

といきなり御神前をひつくりかへし、神さまの祠を殘らず外へ叩き出して了うたといふ面白い物語もあつた。

それから又綾部より役員が出張して、神さまを矯り直し、盛んに會長の攻擊を續行してゐた。會長は澄子と相談の上、嵯峨京都伏見の支部なぞへ氣をつけてやらうと浦上を伴れて、綾部を立出で、園部に一泊してそれから入木へ立寄ると、福島寅之助が矢庭に奥から飛んで來て、

福島「ヤア四足が來よつたシーッ〳〵」

と追ひまくり、ピユー〳〵と痰を吐きかけ、

福島「サア早う去ね〳〵、汚らはしい」

と、靠ではき立てる。モウ斯うなつては、何程事を解けて諭してもダメだと思ひ、匆〳〵にこゝを出立して、嵯峨の信者の友川彌一郎といふ内に出張した。こゝには支部が拵へてあつて、喜樂の教を遵奉してゐた熱心な信者である。然るに友川の態度がいつとはなしに、極めて冷淡になつて居るので妻君に聞いて見ると……、今朝大本から畑

中傳吉さんが出て來て、今上田の貧乏神がお前の所へ來るだらうから、敷居一つまたぎさしても汚れる、キッと貧乏するか、大病になるによつて、艮金神樣や教祖の御命令で氣をつけに來たのだといつて、歸らはりました、そしてこれから京都や伏見の方へ知らしに行くといつて出られました……と包まず隱さず述べ立てた。そこで海潮は浦上と共に京都の三ケ所の支部を尋ねて見たが、どこもかしこも箒で掃き出したり敷居を跨ぎさしてくれぬ、仕方がないので明治座の少し東の横町に畑中の親類で、高町といふ信者があるので、そこを訪問して見ると家内中二階へ上つて了ひ、首のゆがんだ、少し間のぬけたやうな女が一人、坐つて居る。それは畑中の妹でお鯛といふ女であつた。喜樂は

喜樂「お鯛さん、高町さんは何處へ行たかな」

と尋ねると

お鯛「何處へ行つたか知りませぬ、こゝ三日や十日は歸らぬというて、他所へ行かはりました」

と云ふ。

喜樂「そんならお藤さんは何處へ行たのか」

と聞いて見ると

お鯛「一寸よそへ行かはりました」

といふ。

喜樂「晩には歸つて來るだらうな」

と聞いて見ると

お鯛「イエ晩になつても歸らはりしまへん、高町さんもお藤さんも晩にも歸らはりしまへん」

と垣をする。晩に歸ると云へば又夕方に來られては困ると、豫防線をはつて居たのである。それから外の人の宿所を尋ねて見たけれど、何を言うても、知らぬ〳〵の一點張で仕方がないので「女が夜さり内に居らぬ樣な事では、どうで碌な事をして居るのではなからう……」と腹立紛れに二階へワザと聞こる樣に言ひ放つてそこを立ち、七條通まで下つて來ると、浦上は三枚治三郎や西村榮次郎といふ信者の家を訪問すると云うて別れ、西田が伏見方面からやつて來たのに出會し、一所に伏見や字治の方面へ宣傳に行く事とした。

高瀬川に添うて勸進橋の傍まで下り乍ら

西田「畑中の奴、どこからどこ迄も自分等の邪魔をしやがる、大方伏見の方へも行つてるに違ない、彼奴がもしもこゝへやつて來やがつた位なら、此高瀬川へ放り込んでやるのだけれど」

なぜと西田が憤慨し乍ら フト顏をあげて見ると、畑中傳吉が 風呂敷包を負うて眞赤な顏をして出て來るのにベッタリ出會した。京都伏見間の電鐵がそこへ來て停車した。

喜樂「オイ畑中又邪魔しにまはつたな」

といふと畑中は「ホイ〳〵〳〵」といつて走り出し二三丁許り行つて振り返り、ヤレまあ安心だといふ樣な風をして居る。會長は大聲で……「馬鹿ッ」と二口三口嗔鳴る

と西田が

西田「こんな所で大聲で喚鳴る者が馬鹿です」

と氣をつけたので

喜樂「ホンに喚鳴る方が馬鹿だなア」

と言ひ乍ら、伏見の信者を二三尋ねて見ると、又箒で掃き出し、閾を跨がさぬ。

「貧乏神さん小松林さん去んで下され」

と連呼し冷遇するので這入る譯にも行かずはる〳〵宇治まで行つて、御室の支部を訪問すると、こゝも又畑中の注進によつて冷淡至極な態度を示して居る。

そこで西田と別れ、喜樂は只一人京都まで歸り、三枚の宅で浦上と會し、たつた一錢五厘より二人の中に金子がないので、徒歩で愛岩山を越ね、保津へ出で、八木へ立寄り、又もや放り出され、雨のピショ〳〵降る中を震ひ〳〵園部の淺井まで歸つて、麥飯でも喰はして貰はうと思ひ、立寄つて見ると、こゝも又冷淡な態度で茶も呑まさず去んでくれと云ふ。仕方なしに又もや檜山まで歸り、坂原へ立寄ると坂原は折ふし不在で、妻君が一人殘つて居り

「今綾部から畑中さんが出て來て、茶一杯呑ましてはならぬ、艮金神さんのお氣障りになると言はれましたから、どうぞこれぎり、あんたにはすみませぬけれど小松林さんが改心しやはるまでよつて下さるな」

といふ。二人は破草鞋を拾つて足につけ、坂路を上り下り、漸く須知山の峠まで出て來た。そこに蒟蒻を賣つてるので、蒟蒻を一錢五厘で三枚買ひ、宇治から二十四里の道を空腹を抱へて歸つて來たことゝて何とも知れぬ甘さであつた。それから綾部へ歸り、浦上はこり〳〵して餅屋を始め出し、喜樂が神樣を祭つてやつて非常に繁昌を

し出した。さうするとソロ〳〵浦上が慢心し出し、神様の悪口や喜樂の行方までも非難し、頻りに反對を始めて居たが、とう〳〵養雞場を開設して大損失を招き、折角儲けた金も一文も殘らずなくした上、澤山の借金を拵へ、親族や其外の人々に損害をかけて綾部にも居られず位田へ逃げ歸り、細々と豆腐屋を營んで居る。

（大正一一、一〇、一九、舊八、二九、松村眞澄錄）

瑞月

甲子の春を迎へて殊更に
　　靜心なく淋しくなりぬ

第二八章　金明水（一〇、五）

明治三十四年舊五月十五日、出口教祖始め、上田會長、出口澄子、四方平藏、中村竹造、內藤半吾、野崎宗長、木下慶太郎、福林安之助、竹原房太郎、上田幸吉、杉浦万吉等一行十五人は、皐月の晴つた空を目當に徒歩にて出雲の大社へ神命を奉じて參拜することゝなつた。此參拜が無事に濟めば、何もかも神界の因緣が判り、大望が成就するものだと、役員一同の考へであつたらしい。

先づ龍原で一宿し、それから十里程歩いては泊りなどして、漸く但馬の八鹿へ着いた。そうすゝと道々役員連の空想的談話が始まつて來た。そこで喜樂は、

喜樂「そんな事思うて居るとあてが違ふ」

と一口云つたら大變に役員の機嫌を損じ、喜樂に對して餘程冷淡な扱ひをやるやうになり、「ナアニお前等がそんなことが分るものか、御筆先に出雲へいつたら因緣が分ると書いてある」……と威張りちらす。教祖は教祖で、出雲へさへいつてくれば皆の改心が出來る……とすましたものである。途中で四方春三の亡靈が役員にうつつて、澄子と會長との間を不和ならしめやうとかゝり、兩人は其亡靈の爲に非常に惱まされ、途々議論を衝突させ乍ら、日を重ねて鳥取に着いた。それから千代川を汚い舟に乘つて加露ケ濱に出で、加露ケ濱から舟に乘つて三保の關に着かうと計畫したのである。

恰度海が荒れて三日間船を出す事が出來ず、加露ケ濱の旅館で一行十五人が泊り込み海上の風ぎわたるのを待つことゝした。其時恰も海軍中將伊東祐亨氏が山陰沿海視察の爲にやつて來て同じ宿屋に泊つてゐた。教祖が筆先を一枚書いて、伊東中將に宿屋の亭主の手から渡され、よく査べてくれ……といはれたが、それきりで何の返答も聞かなかつた。

喜樂は夜中頃に妙な夢を見た。それは海潮が際限もなき原野に立つてゐると、東の方から大きな太陽とも月とも分らんが、昇られてだん〳〵こちらへ近付き、澄子の懷へ這入られた夢を見て目がさめた。此月すでに澄子は姙娠してゐたのである。それから翌年の正月二十八日に女子か生れたので、朝野に立つてゐた夢を思ひ出し、朝野と名をつけた。これは在朝在野の人々を濟度する子になるだろうといふ考へと二つをかねて付けたのであつた。そうすると朝野が四つになつた年、自分から……わしは朝野のちやない直日ぢやと言ひ出したので、直日と呼ぶやうになつたのである。三日目の朝又もや磯端を傳ひに十里許り西へ進んで一泊し翌朝船を仕立てゝ、三保の關に渡り神

社に參拜し、中海宍道湖を汽船に乘つて平田に上陸し、徒歩にて大社の千家男爵の門前の宮龜といふ旅館に一行十五人投宿した。

二三日逗留の上神火と御前井の清水、社の砂を戴き、二個の火繩に火をつけて歸途につき、稻佐の小濱から松江丸といふ汽船に乘つて境港につき、それから徒歩にて米子に至り、一日計り歩いて又もや今度は帆船に乘り、加露ケ濱の少し東、岩井の磯ばたにつき、行がけに泊つた駒屋の温泉場に再一泊し、又もや山坂を超えて舊六月の四日福知山まで、數百人の信者に迎へられ、漸く綾部へ歸つて來た。途中澄子は產婦に免がれがたきツワリで非常に苦み、石原から時田や其外の大男の脊中に負はれて歸つて來た。

それから其火を百日間埋み火として役員二人が晝夜保存し、百日目に十五本の蠟燭に火を點じ、天照大御神さまへ捧げることゝした。又砂を本宮山や龍宮館の周圍に撒布し三四ケ所の井戸に水を注ぎ、大島の井戸へ天の岩戸の產鹽の水を一所にしてほり込み、金明水と名をつけたのである。其水を竹筒に入れ其年の六月の八日に教祖は會長、澄子其他四十人計りの信者と共に沓島へ渡り、其水を海に投じ、此の水が世界中を廻つた時分には日本と露國との戰爭が起るから、どうぞ大難を小難に祭りかへて貰ふやうに、元伊勢の御水と出雲の御水と、龍宮館の御水と一所にして龍神さまにお供へするといつて祈願をこめて歸つて來られたが、それから丁度三年目に日露戰爭が起つたのである。

出雲參拜後は教祖の態度がガラリと變り、會長に對し非常に峻烈になつて來た。そして反對的の筆先も澤山出るやうになつて來た。澄子が姙娠したので、最早會長は何

程厳しく云つても帰る氣遣はないと、思はれたからであらうと思ふ。それ迄は何事も言はず何時も役員が反對しても辯護の地位に立つて居られたのである、いよ〳〵明治四十年の十月頃から會長が變性男子に敵對うといつて、彌仙山へ岩戸がくれだといつて逃げて行つたりせられたので、役員の反抗心をます〳〵高潮せしめ、非常に海潮澄子は苦心をしたのであつた。それから大正五年の九月九日まで何かにつけて教祖は海潮の言行に對し、一々反抗的態度をとつてゐられたが、始めて播州の神島へ行つて神懸りになり、今迄の自分の考が間違つてゐたと仰せられ、例の御筆先まで書かれたのである。

今日迄の經路を述べ立つれば際限がなけれ共只靈界物語を口述するに當り、大本の大要を述べておくのも強ち無用ではないと信じ、こゝに其一端を古き記憶より呼び出し、述ぶることゝした。まだ〳〵口述したきことは澤山あれ共、紙面の都合に依つて本卷にて止めおくことにする。後日折を見て詳しく發表するかも知れぬ。

惟神　靈幸倍坐世。

（大正一一、一一九、舊八、二九、松村眞澄錄）

瑞御魂水の都に下りなば　瑞月

御代を清めの浪の花咲く

‖舍身活躍（丑の卷）終り‖

大正の秋も十餘り二ッ年
神の使りを菊月の
下の三日に月の露　三十三相の玉の肌
天津空より降り來る　清く涼しき玉の糸
結ぶの神の御惠み　世は高砂の神の島
千代に榮ゆる一つ松　緑の梢ぞ久しけれ

大正十三年三月二十五日印刷
大正十三年四月三日發行

舍身活躍丑の卷奥附

定價金壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地
編輯發行兼印刷者　櫻井重雄

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ッ辻十三番地
發行兼印刷所　天聲社
【振替大阪六〇五三四】

不許複製

王仁文庫（全十篇）

出口瑞月氏が神授の大經綸と天來の大抱負と、縱横の大神機と時に應じ機に臨みて、隨所に閃發せし文章詩歌其他二十有餘年間積んで山をなす。乃ちその中より、精粹を拔き、珠玉を選び、序を正し類を纂め、王仁文庫と題して茲に刊行の機運に向へるは誠に時代の急迫の然らしむる所にして、實に百萬讀者の渴望を醫する神液甘露たりと謂ふべし。

王仁文庫
第一篇

皇道我觀

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

「皇道我觀」は皇道の眞髓を縱說橫論し、世道・人心の歸趨を指示せる大文字にして皇國の臣民たる者の必讀の名著たり。

王仁文庫
第二篇

國教論集

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

本篇には「國敎樹立論」「信仰の墮落」「皇國傳來の神法」「太古の神の因緣」の四篇を收む。皇道の眞髓は一貫して漲り溢れ、國敎は腐敗し信仰の墮落して其極に達した る混沌の現今を救ふは本篇に依らざるべからず、太古の神々の因緣は必ず見落す勿れ。

王仁文庫
第三篇

瑞能神歌

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

瑞の神歌は裏の神諭にして仁愛大神の人類に與へられたる神示なり、方舟なり・救世の綱なり、すみやかに起りつゝあり亦速やかに起るべき大地獄道の火焰をまぬがれんとせば、本篇を見よ。叩かざれども開かれし救の門、求めざれ共仁慈の神は之れを與へられぬ。迷ふ勿れ!!來れ!

王仁文庫
第四篇

記紀眞解

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

世に國學者を以て任ずる者徒に多しと雖も、眞の古事記を解する者一人として無し、日本書記を解する者亦あるなし、之れ其內義を理解する能力なき爲めなり、本篇は「古事記」の一節及び「日本書記」の一節を解釋し密義を發現されしものにして現代と併せ解釋され必ず何人も肯定する樣平易に解かれしもの也

王仁文庫
第五篇

道の大原

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

三丹の巒峰を一眸に收め、保津の清流を双脚に踏みて、高倉山の山徑に宇宙の秘密と人生の幽旨とを問答せる顯幽の二大神人あり。一を本田親德大人の幽委となし、一を出口瑞月氏の顯證となす。而して其神言秘語を集拾類纂せられしものは本書也。

王仁文庫
第六篇

多滿の礎

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

本書は教祖の表の神諭に對する出口瑞月氏の裏の神諭の一部分也。迷へる者、惱める者は本書によりて靈魂の糧を求めよ。

王仁文庫
第七篇

記紀眞釋

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

本書は古事記日本記の神代の卷を眞釋して現代の危機を救濟指導せんとするの大文字也。本邦千古の神文古典に含蓄せる豫言的價値を知らんと欲する者は、先づ一讀することを怠るべからず。

王仁文庫
第八篇

八面鉾

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

本書には「公認教と非公認教」以下都合八篇を收輯す。何れも出口瑞月氏が皇道と宗教の本義に就き縱說橫論し、當局並びに世人の無智と偏見とを指摘し批判を加へて遺憾なからしめたり。

王仁文庫
第九篇

道の大本

定價 金四拾錢
郵税 金貳錢

本書は表の神諭に對する裏の神諭なり。言々句々これ混亂的現代に於ける大救世主の救ひの聲にして天國に入るの關門なり。

王仁文庫
第十篇

五色草

定價 金四拾錢
郵税 金貳錢

本書に收むるもの「彌勒の世」「⊙の意義」「三種の神器」「道」「神躰詩」の五篇なり。全然行詰れる現代に處して未來を達觀し、將に來らんとする世の變動を前知せんと欲する者は本書によりて先づ幽玄微妙なる神慮を悟らざるべからず。

販賣所

京都府何鹿郡綾部町
天聲社
振替口座大阪六〇五三四番

290
749